
ワールド・ロスト

hide101

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールド・ロスト

【Nコード】

N1394Y

【作者名】

hide101

【あらすじ】

世界が変わる。

天界と人間界が融合を始め、世界が壊れ始める。

神か人か。地上に支配者は二つと必要ない。

主人公、暁コウの世界は、神と出会い、友人となることで崩壊を始めた。それでも彼は自分の周りの世界を守るために戦い続ける。

これは人に魅せられてしまった神と神に気に入られてしまった人々の崩壊最前線。

プロローグ

コウは世界の変容をフィルター越しに眺めた。

テレビに映っているのは異形の怪物。

何が一番近い動物かと問われればゴリラだが、テレビの怪物は両腕部が異常なまでに盛り上がっており、体のシルエットはゴリラに酷似しているものの、頭はグロテスクな蟲の形をしている。二足歩行が可能らしく、全身が体毛に覆われたその化け物と相対すれば人生をあきらめさせるには十分すぎるほどの巨躯と凶暴性をもっている。

「もうあのビジターがニュースに出てんのか。ブン屋もがんばるねえ」

コウの父、暁タダトが朝ごはんを片付けつつ、コウが見ていたニュースに写っている化け物の総称を口にする。

「おい、親父。ピーマン残ってんぞ」

コウはタダトが自然に下げようとした皿に残っているピーマンを指して下げることが止める。言葉にはありありと非難の色が内包されている。

「……これ、喰い物だったか？」

父の言葉を受けコウの顔はますます歪んだ。

「俺が作った飯が食えないって？」

二人暮らしのこの家で家事はコウが一手に引き受けている。

学生であるコウにとって時間はタダトよりも自由であるという理由でコウが自らかって出たのだが、自分の父の偏食にはほとんど困っていた。

二人の間に火花が散る。

いつもならここで父が負けることが常だ。

そして今回も全く恒例通りに父が折れた。

「相変わらず厳しいな息子よ」

「うるせえ！いつもこうなるんだから初めっから喰えよ！時間の無駄だろうが！……っと、いけねえ」

コウは父への説教を中断すると玄関へと歩き出す。

「どうした？学校までまだ時間はあるだろう？」

「今日はクラス委員長に呼ばれてんだよ」

「お、告白イベントか？」

「やかましい！」

茶化す父にお決まりの言葉で返し、コウは自宅ぼろアパートを飛び出した。

父に付き合っていると本当に遅刻確定だ。

青年は自身の日常を信じ切っている。

友人、家族、恋人。全てが不変なものであると無意識に思いこんでいる。

すでに日常は浸食されつつあるというのに青年はそれに気づかない。

これは青年が、全てを失う物語。

プロローグ（後書き）

初めて小説を書いてみました。
誰か楽しんでいただけたら幸いです。

出会いは待ち伏せ

コウはいつ買ったかとも思い出せないボロいママチャリに跨ると力強くこぎ出した。まだ秋になって間もないのに異常に寒い。マフラーと手袋は欠かせない。

河川沿いにあるサイクリングロードから見える風景も半年前と比べ随分変わった。

なだらかな斜面に、大砲の一撃が破裂したような穴が不規則な間隔を開けて三か所。

今朝やっていたニュースにあったビジターとは違う種類のビジターが出現し、この近辺で暴れまわった事件があった。死者が十二人出たあの事件をコウは目にしなかったものの、いきなり現れた人外の化物が行った破壊行動は一カ月過ぎた今でもきっちりに残っている。

そもそもビジターとは何か？

今の所分かっているのは内臓にあたる器官がなく蓄電器のようなエネルギーを溜める器官がありそれで動いている。

そしてなにより恐怖なのは何の前触れもなく現れるということだった。

瞬間移動してきたかのようにいきなり現れるのだ。出現位置に法則性はなく、ただ気まぐれに奴らはあらわれる。予兆として空間の歪みのようなものはあるらしいが、それから現れる時間が短すぎるため、対処は後手に回らざるをえなかった。

それに関してのコウの関心はあまり高くない。恋人が対ビジターに対しての施設にいるとしても自分にはビジターがいつ現れようがどうでもいいと感じていた。あいつらは天災の様なものだし、いくら警戒しても運が悪ければ出くわしてしまう。そういった時に自分が対処する行動をあらかじめ頭に設定しているとはいえ、実際にどう動けるかというのはまた別問題だ。

命の危機に瀕した時、生物は思いもよらぬ行動を取る。

コウはそれが身をもってわかっていた。幼い記憶が頭にフラッシュバックし、コウは心なしか顔をしかめた。これもこんな破壊的な光景を見た影響か。連日目にしている光景だが記憶というのはたとえ切っ掛けが無くてもよみがえってくるものが度々ある。随分と改善されたとはいえ未だに癒えることないトラウマはコウに命の儚さと無情さを否応なく伝えてくる。

「……まだ余裕か」

コウはそう感じると、自転車を降りた。ここのサイクリングロードはコウのお気に入りスポットの一つだ。見下ろす川はいつだって綺麗だし、空気がうまい。立ち止まって思いつき深呼吸すると、清い一日を迎えられる気がする。気を取り直す意味で深呼吸を終え、すっきりとしたその時だった。

「おい」

声に反応して、横を見るといつの間にか見たことのない女性がいる。

優雅な金髪は金色の稲穂を連想させ、鋭い目つきを有した凛々しい瞳はコウの眼を釘づけにした。不敵に笑った口元は人懐っこさを連想させ、コウはしばし我を忘れて女性を見つめた。

「む、そう熱心に見つめられると私も照れるのだから」

不敵な笑みを崩さずコウに笑いかける女性にコウは慌てて応対した。

「す、すいません」

「よい。気にするな。私はルウラという」

「暁コウです」

コウは見た目通りに外国人的な名前を覚えてくれたルウラという女性の日本語の流暢さに感心した。

「なるほど。君が暁コウで間違いなかったか。よかった。別人だったらどうしようかと思っていたんだ」

カラカラと陽気に笑うルウラにコウは素直に疑問を覚えた。

「ええと、俺に何か？」

「ふむ、そうだな。急いでいるようだしさっさと私の用事を済ませようか。神原ハヅキの恋人とは君だな？」

ルウラの言葉にコウは警戒心を強める。コウの恋人であるハヅキは結構デリケートな立ち位置にいる。もしハヅキに敵対する人物であれば対応はしっかりしなくてはならない。

「……ハヅキに何か？」

コウの硬質化した態度にルウラはきょとん、とした顔をする、次の瞬間には納得した顔をした。

「ああ、私は疑われているのか。なるほど、ハヅキは良い恋人をもった。ふむ、困った。どうにもハヅキ以外の人間とはろくにしゃべったことがないのでな」

「な、なんでハヅキと俺が恋人だって……」

コウは自身が一言もハヅキとは恋人だと明言してはいないのに、ルウラのいやに確信的な様子に焦りを隠せなかった。

「ふふふ、甘いな。暁コウ。そういう態度だからすぐに看破される。おっと、一般人の君に言っても無いものねだりということか」

ニヤニヤとコウの顔を見つめるルウラはまるで悪戯が成功したというような愛嬌のある顔をしていて、コウは怒る気力が失せてしまった。

「……ええと、貴方は何なんですか？」

無気力に應えるコウにルウラはよく聞いてくれましたと、胸を張った。

平べったい。

コウは率直に失礼な感想を胸に抱いた。

「私は君の恋人の友達だ。こっちに来てからハヅキにはよくしてもらっている。もっとも君は恐らく私のことを聞いたことはないだろうがな。ハヅキは良い女だ。公私混同はしないだろう。あれは優秀だぞ。さすがにあの若さで対ビクター兵器部の室長を任されることはある。料理のへたくそさ加減がたまに致命的だし、あのでかいお

っぽいは見えて業腹ものだが、包容力がある。女性とはかくありたいものだ。おっと、私の話だったな。私に関してはハヅキと友人だということ以外にとりたてて話すことはない。君に会いに来たのも単に君がどんな人物か興味があっただけなんだ。以上」

コウは一気にまくし立てられた言葉を何とか整理した。

とにかく眼の前にいるルウラと言う女性はコウの恋人が大好きであるらしい。あれだけべた褒めしたんだから間違いないだろう。それでコウがどんな人間か興味が湧いて来たと言うらしかった。で、おしゃべり好きだ。……間違いなく。

「はあ、会いに来てくれるのは嬉しいですけど、俺は特に面白いところないですよ?」

「むむ、まだ警戒心を解いていないか」

ルウラの指摘は正しかった。いくら愛嬌があるとはいえ、ハヅキの友人であるという確証はどこからも得られていない。そういうところはしっかりしなくてはならないとコウはハヅキと付き合うときに決めたのだ。

「なるほど、君もまた、いい人間であるようだな。暁コウ」

(……人間?)

何となく引っかかる表現にコウは首をかしげたが、単なる言い回しの問題だろう、とそれ以上気にかけることはなかった。

ルウラはニヤリと笑ってコウの眼を見つめた。その視線にコウは一瞬、ドキリとする。

「また日を改める。その時は存分に語りあうでしょう。また明日、この時間に同じ場所で待つ。それまでにハヅキに私のことを尋ねておいてくれ」

そういうとルウラは踵を返し、颯爽と立ち去って行った。

「……………なんだったんだ?」

コウはその時自分の身に置かれている状況を思い出した。このままでは遅刻だ。

ゆっくりしすぎた。

少々後悔しつつ、コウは自転車に乗ると、勢いよくペダルを踏み込んだ。

リアルは充実

結果的に時間にはある程度余裕をもって学校に到着することが出来た。肩で息をしつつ、自分のクラスに向かうとクラス委員長である神原アイが待ち構えていた。

二人きりの教室という思春期ならば盛り上がってしかるべきシチュエーションにもかかわらず、コウはあまりの緊迫感につばを飲み込んだ。

「随分と遅いお着きで」

外国人の血をもつ姉と同じ美しい銀髪がアイの肩で揺れる。鋭い眼光がコウを刺す。友好的な雰囲気は皆無だ。コウはアイが不機嫌になるいくつもの候補があり、生きた心地がしない。

「時間どおりだろうが」

口から出た抗議の声はアイの眼光に弾きかえされた。

「呼び出された理由。分かるか？」

つかつかと詰め寄り、アイはコウを下から睨みつける。顔は笑っているが、眼はまるで笑っていない。なぜ女はこんな顔が出来るのかとコウは素直に感心していた。やたらに凄味がある。

「ええと、心当たりがありすぎて……」

コウはひきつった笑みでこたえる。

「あんた、エリコに告白されただろう！」

怒声と同時にアイに襟元を両手で絞めあげられる。

「ちょ、きま……極まってる！」

コウが何度もタップするがアイは手を緩める気配が一向にない。

「あんたにはハズキ姉さんがいるでしょうが！ なに告白されてんだ！」

あまりに理不尽な物言いだったが、コウは既に限界に近い。酸素が欠乏し、視界が黒くなっていく。ここにきてようやくアイは手を離れた。コウが限界に近付きつつある所で手を離す。いつもの手際

は見事としか言いようがない。

コウは腰を曲げて酸素を必死に取り込んだ。

アイなんて名前が付いている割に彼女はひどく攻撃的な性格だった。

「……………それ、お前に怒られることか？」

「ああん？」

アイの一睨みでコウはあっさりと沈黙した。幼少期から続くこの関係はもはや覆しようがない。

「おい、暁コウ。あんたが姉さんと付き合うときに私の前で宣誓した三つの誓いを言ってみ？」

「ハッ！一つ、ハヅキを幸せにすること！二つ、ハヅキを悲しませないこと！三つ、ハヅキを一番にすること！」

パブロフの犬のように復唱する自身の姿にコウは同情を禁じ得なかった。

「よろしい。このふぬけたクラゲ野郎」

（俺、いますごく可哀そう！）

「なにを考えた！」

「ハッ。アイさんの指摘は素晴らしいと考えておりました！」

アイの異常なカンの下さに驚愕しつつ、前もって考えていた言い訳を口にする。その言葉にアイは満足げに頷いた。

「そうだろう。そうだろう。お前のような犬は私のような奴が必要なのだ」

（うるせえ、馬鹿）

瞬間、コウは右頬に鋭い痛みを覚えた。アイがコウの頬をつねりあげたのだ。

「いひゃい、いひゃい！ひゃめろ！」

「お前の考えなど先刻承知だ！一体何年付き合っていると思っている！」

アイはコウの頬を離すと、自分は椅子に腰かけた。コウは腰かけない。自身に染み込んだ主従関係にコウは毎度のことながら絶望し

た。

「で、実際のところどうすんのよ」

「あ、もういいっすか？」

コウの腰ぬけた態度をアイは鷹揚に受け止め着席を促した。

「いつの間にこんな事に？」

コウはアイに昨日放課後に起こったことを語りだす。

手に持った通学鞆を危うく落としかけるくらいの衝撃は今でも記憶に新しい。学校の裏手と言えば往々にして不良のたまり場というイメージが強いだろう。事実、コウもそう思っていたし、こんな事が起こる前まで友人の『高坂メツ』が言っていた「学校の裏は本来、男女が告白に使う場所」という言葉も冗談ぐらいにしか思っていなかった。

ざっと自分の欠点をあげればきりが無い。

かなりいい加減な性格だし、そのことでよく幼馴染にも怒鳴られている。学校の成績だって数学、体育を抜けば悲惨なものだ。だからこそ、誰かから告白されるなんてことはコウにとってはお伽話くらいに遠い幻想世界の話であり、我が身に起こっている状況は疑ってしかるべき状況であるとコウは判断した。

「えーと、本気？」

口から出た言葉はまるで気の利いたものではなく、コウは目の前でカチコチになっている少女に真意を問うた。

「え、ええと！返事は！今度して下さい！」

そう言い残して赤毛をぶんぶんと振りながらエリコは去っていった。

「……今度っていつだよ？」

コウは溜息をついて渡されたラブレターをしげしげと眺める。

（別に俺じゃなくていいだろう？何で俺なんだよ？）

エリコはかわいい。

くりくりとした眼は愛嬌があって小動物のようで守ってあげたいという気分にさせるし、努力家と言うよりはがんばり屋さんと表現

した方がしっくりするその性格はいつだって抱き締めたくないと女性との間で評判だ。

コウは溜息をついた。

どうして自分なのだ、と。

人には限界というものがある。一人の男が本当に幸せにできる女なんて一人しかいないのだ。これこそがコウの困っている原因だ。コウは頭を抱える。

自分にはもう最愛の女性がいるというのに……。

語り終えたコウは言い終わって顔を少し赤らめるとバツの悪そうな顔をした。こういうことはだれかに相談するようなことでもないし、かといって自分にはどうやって断りを入れればいいのかも分からない不甲斐なさからくる表情だ。

「……っーか、何でお前が告白されたこと知ってんの？」

「ユミに教えてもらった」

女子の情報網はこういったことにはかなり強い。コウの出来事など恰好の獲物でしかない。

「で、姉さんには言ったか？」

「言えるか！俺自身こういうのどうやって断っていいのかわかんねえんだよ！」

コウの言葉にアイは心底見下げ果てた、という表情をした。

「はあ。このヘタレめ。けど姉さんに言わなかったことと、断る気があるっていうところだけは評価してあげる」

「ぐぬぬ」

コウはアイのあまりの言いっぷりに腹を立てたが、なんとか堪えた。どうせ抵抗したところで返り討ちにあうのが目に見えている。

「いい？こういうのはね。一言、ごめんなさいでいいの」

「ああ？それだけでいいのかよ？」

コウが怪訝な顔をして抗議する。

「それでいいの。下手に言い訳すればそれで想い人に関して幻滅するかもしれないし。……大体あんた格好のつく言い訳考えられるの

？」

「…………無理だ」

「でしょう？だから、ごめんなさいを言った後はなににも言わずにクールに去る。わかった？」

「分かった。クールに去る」

コウが心底感心したように首を縦に動かすのを見てアイは溜息をついた。

「なんでエリコはこんな奴……」

アイはコウの顔をしげしげと眺めた。世間一般的に美形といわれている人間たちとは違うタイプではあるものの、コウも整った顔をしている。野性的な健康さをもっていた。それに女にもてるのにも理由がある。運動がやたらと出来るのだ。特定の部活には入っていないが、その運動能力は特筆に値し、学校にいる全国レベルの運動選手にも勝ったことがある。本人が家事をしなければならぬので特定の部に入ることを断り続けていることが家庭的な面を強調し、なおかつコウをイレギュラーな存在と周りに認識させ、かなりイメージは良くなっている。

「ねえ」

「ん？」

「あんたさ。なんで姉さんだったわけ？」

早朝で誰もいないことをいいことに今まで聞けなかった事をアイはコウに問うた。

「ん、一番好きだからだよ」

ごく自然に答えたコウにアイは大笑いしてコウの肩を叩いた。

「そうそう、そうに決まっているよな。あんたは姉さんが一番だもんな」

コウは意味不明だ、と言う顔をしてなぜ笑うのか問おうとしたところで他のクラスメイトが来たのでアイは自分の席に戻って行った。（なんなんだよ。俺のことより自分の恋愛の心配しとけての）

コウは心でそう毒づく、余った時間は夕御飯をどうするかと思

考の時間に回すことにした。なにしろ今晚は親父がいない。久々に恋人ハヅキと二人きりの夕食である。

すでに大学が決まっているコウにとって三年の自習時間が主な授業と言うのは退屈の極みと言えた。

その退屈な時間を教室の風景画を描くということで何とか紛らわせば待望の昼休みだ。

「おい。コウ」

昼休みになったとたん、アイがコウの机に近寄り、コウのノートを目にする。

「何これ？壊れたテレビ？」

アイがコウの書いた絵を見て率直な感想を漏らす。昔一度アイの似顔絵を描いた事があるが、その時は二度とするな、というお言葉とともに回し蹴りを頂戴した。

「ああ、そんなことどうでもいいわ。……エリコが呼びよ」

アイの言葉にコウの緊張感が増す。

「いい？今からアンタはエリコの希望を木っ端みじんに打ち砕く。きっとあの子はこれから始まる希望に満ち溢れた日常を想像しているに違いない。けど、あんたの今からの答えはそんな女の子の夢を破壊すること。このこと、肝に銘じなさい」

今から修羅場に突入する者にも辛らつな言葉を投げつける。アイは内心「少しは動揺しろ」と言った風に送り出そうとしたが、対するコウの顔は凜々しいものだった。アイはしばし、コウの顔に目を奪われる。

「分かっているよ。俺はあの子とは幸せになれない」

コウの言葉にアイは後悔を感じずにはいられなかった。これではまるで嫉妬に狂った女のようなではないか。

コウは赤毛でくせ毛のかわいらしい女の子と一緒に教室を出るの

を見送るとアイはなおさら自身の矮小さが恥ずかしくなり、自分の机に突っ伏した。

学校の裏手に人が誰もいないことを確認するとコウはエリコに相対した。

エリコの顔は期待と不安が内包した複雑な表情をしていた。コウも周りと二人の間の空気があたかも別のもののように感じるほどの緊張感に体が強張る。

コウは深呼吸し、そして頭を下げた。

「ごめん！」

コウの返事にエリコは眼を伏せる。

「……うん。そうだね。コウ君と私じゃ、釣り合わないよね」

「いや、そんなことないって」

涙ながらに語る少女の言葉についてコウは反論してしまう。ここで何も言わずにクールに去るという選択肢はなくなってしまった。鼻屑目に見なくてもエリコはかわいらしいと思う。別のクラスだが彼女の良い評判はコウ達のクラスにも届いている。図書委員である彼女はよく図書室で料理本を借りていくコウとはある程度親しい仲でもあった。

「理由。聞かせてもらってもいい？」

コウは内心、自身に対して毒づかずにはいらなかった。

アイの教えはこのことも見越しているの教えだったのだ。人は理由を知りたがる。基本的にお人好しのコウはエリコにまた傷つける言葉を伝えないといけないのかと思うと、中々口に出せなかった。本当の事を告げたほうが双方にとっていい影響を与えるということ。コウは人生経験の不足から理解していない。

長い沈黙が過ぎ、ようやくコウは口を開いた。

「……………他に好きな人がいる」

「そっか」

コウの言葉にエリコはすっきりとした顔をしていた。

「ありがとう」

「なんで礼なんか……」

「私に、真剣に向き合ってくれたから」

エリコはそういうとくると踵を返し、校舎へと去って行った。

小さな背中が震えているのを確認し、コウは偽善的とはいえ罪悪感を覚えることを抑えずにはいられなかった。

コウはベンチに腰を下ろすと天を仰ぎ、脱力した。次の授業はサボリ確定だ。どうせ自習でやることなどない。退屈な時間を過ごすならどこに居たって一緒だろう。とにかく精神的に疲れた。しばらく何も考えたくないし、誰にも会いたくない。そんな気持ちでベンチにずるずると横たわろうとした時、見知った顔が視界に入る。

線の細い端正な顔立ちで服装規定の緩い本校で着崩した着こなしが主流にもかかわらず、ピシッと模範的な服装をした男子は人懐っこい笑みを浮かべてコウに歩み寄ってきた。

「大変だったね。コウ」

「のぞき見か？優等生にしては褒められたことじゃねえな。高坂メツ君」

皮肉たっぷりに返事を返すと、メツは言われても仕方が無いという風に苦笑した。

「聞くつもりはなかったんだけどね。ウサギの世話をした帰りに出くわしちゃって」

コウはメツが日ごろ世話をしているウサギ小屋がすぐ近くにあることと、メツが毎日この時間にウサギの世話をしている事を思い出した。

「ああ、その、それは悪かった」

「いいよ。謝らなくて。結果的に覗き見してしまったのは事実だし」
日常的なことを行っているだけだったメツからしてみれば先ほどのことなど降ってわいた厄介事でしかない。メツは口が堅いし、そ

れに覗き見なんてするような人間でもない。コウが優等生と言ったのは事実で学校一の成績に人望も厚い。そして、コウの無二の親友でもある。それを斟酌した上でコウは先ほどの皮肉を詫びたのだが、メツはそれを寛容に受け取る形になった。

「……次の授業は？」

コウの横に腰掛けて、メツはコウの顔を窺う。

「サボリ」

短くコウが伝えるとメツは「やっぱりね」と苦笑した。

「だったら僕もサボろうかな」

「はあ？　なんでお前までサボる？」

ほっとけ、という言葉外の付け足しが届いたにもかかわらず、メツは依然として立つ気配を見せなかった。

「中々にしんどい恋愛だよね」

メツはコウに同情の視線を向けるが、コウは手を振ってその視線を拒絶した。

「よせよ。俺個人がどうしたってどうしようもないことって世の中にはたくさんあるだろ？　世界経済しかり、政治しかり、アイの暴力癖しかり……あげたらきりが無い。ハヅキとの恋愛は事前にこうなることが分かっていたし、俺たち二人はそれを納得づくで付き合い始めたんだ。同情されることなんか一つだってない」

コウのその年にしては達観した恋愛観をきいてメツは目を伏せた。確かに余計なお世話だったかもしれない。

コウとハヅキの恋愛は公にはされていないし、秘密であるべきというのが原則だ。何せコウの恋人であるハヅキはかなり国の機密に触れているため、間違はなく国の要人と言って間違いなし、取り扱っているものも平和的とはいえない。そうなれば必然的にコウの立振る舞いにも色々と制約が付いてくる。コウがハヅキとの関係をおおっぴらにできないのはそういった問題からだ。ハヅキは対ビクター兵器の第一開発者という顔を持つ。ビクターは世界中に現れていて、世界各国があゝの異常にタフで神出鬼没の化物に対しての兵器

開発に四苦八苦している。なにしろ相手は銃火器をもともしないタフさを誇り、戦車を引っ張り出すか、なかなか死なないとわかっていても銃火器による飽和射撃で相手を沈黙させるしかない。その間にかかる人的被害、コストはまるで見過ごせるものではなく、各国の軍隊が手を焼いていた。そんな時に現れた天才がハヅキだった。彼女は次々に現れるビジターに関して有用な兵器を次々と生み出し、その地位を確立させていった。その才能をどの国も欲しがり、産業スパイじみた行為も平気で行ってくる。事実、コウもそういった類の人種にあつたことがある。一度拉致されかかったのだが、事前にハヅキがコウに持たせていた対ビジター兵器を応用した『防犯道具』で事なきを得た。

「秘密にするのは別に苦じゃねえよ。正直、騒がれるのも面倒だし。確かに中々会えないのは苦しいけど、会えたときは人一倍うれしいもんだ」

コウの言葉にメツはほほ笑んだ。どうやら自身が思っているよりも二人の関係は強固であるようだ。ちなみにメツが二人の関係を知っているのはアイが口を滑らせたからで、その時は珍しくコウがアイを叱り飛ばした。あの時のコウは少なくともメツの記憶の中ではコウが最も怒っており、アイは見たこともないほどしょぼくれていた。幸い聞いた人間がメツだったため、それ以上広まっているということはない。

「……話していたらすっきりしたぜ。ありがとな」

コウはそう言ってメツの肩に手を置き、感謝の意を伝える。メツはその意を受け取ると素早くコウの手を取った。

「すっきりしたようだなにより。それでは授業に行こうか」

「ちょっと待て。俺はもうサボリモードなんだ。放っておいてくれ」
「優等生だからね」

にっこりと笑ってそう告げるとメツは引きずる様にコウを連れ出した。コウは最後まで往生際悪く抗うが、まるで聞いてもらえなかった。

リアルは充実（後書き）

楽しい学園生活って憧れますね。上手く書けていればよいのですが……。

恋人と昔話 神様と会話

学校が終わると友人たちの誘いを軽くいなしてコウは急いで家に帰り、腕によりをかけた料理を見事な手際で作り上げていく。最愛の人が家に来るまでもうすぐだ。コウが最後の味見をし終えた時、丁度チャイムが鳴った。

「はい」

コウが扉を開けるとそこに立っているのはアイと同じ銀の髪をもつ女性だった。アイの活発そうなイメージとは間逆でおしとやかな女性であると一発でわかる。柔らかにほほ笑む女性はコウの恋人。

神原ハヅキだった。

うかれるコウとは裏腹に落ち着いた物腰であるが、ハヅキもこの日を楽しみにしていた。最近仕事忙しいおかげで中々二人きりの時間が作れなかったのだ。

「座って座って。もう盛り付けるだけで終わるからさ！」

コウはハヅキを居間に誘導しようとハヅキの手を触れた瞬間。グイッと引つ張られコウの顔はハヅキの顔に急接近し、そのままコウはハヅキに唇を奪われた。熱い吐息が互いの口中を行き来することたっぷり三秒。唇が離れたとコウが実感したところには最愛の女性は靴を脱ぎ終わっていた。

「おじゃまします」

悪戯っ子の笑みをたたえてハヅキは固まったコウを尻目に居間に歩く。勝手知ったるなんとやらだ。

（俺、いますごく幸せ！）

コウは幸せでフラフラしながらキッチンに戻り、鼻歌交じりに盛り付けを始める。今日のメニューはビーフシチューだ。慣れた手つきで盛り付けを終え、居間に運ぶ。

「お待たせしましたあ！」

ハヅキはコウの作った料理を見て、顔を輝かせた。

「ビーフシチュー！コウの得意料理だね」

「ふふん。今日はなかなかの自信作だぜ」

「うれしいな。コウの料理好きよ。私が食べてきた料理の中でコウの料理が一番好き」

「そんなに褒めるなって」

デレデレしながらコウはハヅキの向かいに座り、二人で食事を始める。

「いただきます」

コウの料理を口に運んでハヅキは幸せそうな顔をした。本当にこの子の作る料理は美味い。将来、店を出していいレベルだ。

「ん、ルー変えた？」

「気付いた？ちょっと辛めになるようにしたんだ。ハヅキの方が好きだろ？」

「うん。好き」

恋人の心遣いにハヅキは頬を緩める。本当にコウはいい恋人だ。

「最近仕事大変だったから中々コウに会えなくてさみしかった」

上目遣いにこちらを見るハヅキの頭に手を伸ばして頭を撫でるとハヅキは満足そうな顔を浮かべる。猫のようだ、とコウは思った。

「そんなに忙しいの？」

「むー、最近やたらと上からせつつかれちゃってさ。有効性がどうか、コストがどうか。ビジターなんて正体不明のモノ相手にしている以上どうしても、ね」

ハヅキはこの町にある対ビジター兵器施設開発部門の室長だ。かなりの才女であり、大学も飛び級で卒業している。彼女がいなければ半年前に現れたビジターも対処できなかった。

「そんなことよりも！今日大変だったんだって？アイに聞いたよ」
ハヅキの言葉にコウはむせた。ハヅキが慌てて水を差し出す。

（あ、あのアマ。言わないんじゃないのか！）

コウとアイはハヅキが今は仕事で大変だからという共通認識があったから余計な気をもませないためにハヅキに言わないということ

にしたはずなのだ。

「むー、言ってくればよかったのに」

若干、怒ったようなハヅキにコウは慌てた。

「いや、それはね。あのね」

コウの慌てる様を見てハヅキは愉快そうに笑った。

「嘘だよ。こういうことはコウが自分で決めないとね」

意外な回答にコウは眼をぱちくりさせる。

「私に関わるのはフェアじゃないわ」

「そういうものかねえ」

ポリポリと頭をかくコウにハヅキは「それにね、」と続けた。

「コウは私にぞっこんだから」

今度は先ほどとは比較にならないぐらいに盛大にコウはむせる。

その様子を見てハヅキはさも可笑しそうに笑った。

「な、なにをいきなり……」

「あははは。コウったら。顔真っ赤」

笑いすぎて出てきた涙をぬぐいつつ、ハヅキはコウを指差す。

「アイの奴め……」

「ああ、あの子を怒らないであげて、私が無理に聞き出したただけから」

そういうとハヅキはニワトリの首を絞めるジェスチャーをした。

一瞬、コウは背中がひやりとする。ハヅキとアイの力関係ははっきりしている。過去に何度か見たが、ハヅキはアイが悪いことをした時や、心配をかけるような真似をするとかなりひどいお仕置きをする。以前見た時、アイは往来のど真ん中で四つん這いにされて犬の真似をさせられていた。それを無邪気に笑うハヅキにコウは純粋に恐怖した。その時の情景がフラッシュバックする。

「だって、やたらに落ち込んでるから理由を聞いているのに言わないだもん！」

コウの引きつった表情にハヅキはフォローを入れようとした。

物心ついたときから三人は一緒にいる。その時々で関わっていい間

題と関わってはいけない問題は何となくわかる。ハヅキはこのケースは関わってよいと判断したのだろう。

「ん？　そういや、なんでアイが落ち込んでんだ？　あいつ落ち込むよ
うなこと今日はなかったと思うんだけど」

「ただの自己嫌悪だよ」

ハヅキはアイがコウに恋愛感情をもっていることを知っている。
だからと言って負い目はなかった。恋愛に関しての勝者がそのこと
を引き摺り続けられれば何が何やらわからなくなる。

「ふーん。ま、いいか。たまに凹むのもあいつに取っちゃいい葉だ
ろ」

コウはそういうとシチューを頬張り始めた。

「なあ、ハヅキ」

「ん？」

「今日、ルウラって女性に会ったんだけど……」

コウがそういうとハヅキは数度瞬きをして、納得した顔をした。

「ああ、それであの子はあんなに上機嫌だったんだ」

「ああ、あの人やっぱり友達だった？」

「うん。私の仕事でもパートナーだよ」

「そっか。また来るとか言っていたけど……なんで俺に興味がある
のかねえ？」

「私がいつもあの子にコウのこと話しているからかな。あの子、見
た眼に反して幼いから」

「分かった。それじゃあ、それなりに対応するよ」

コウがそう言うのとハヅキはスプーンを止め、コウの眼を見つめた。
コウも改まった雰囲気を感じ、ハヅキに相対する。

「ごめんね。私の仕事に巻きこんでしまって」

ハヅキの口から出たのは心よりの謝罪だった。コウはその言葉を
受け止めると、首を振る。

「これくらいで気にするな。俺はハヅキに救われたんだ。ハヅキの
役に立てるなら、これ程うれしいことはない」

「でも……」

「ハヅキと付き合えたから、俺は真人間に戻れたんだ」

コウは自身の最も痛ましい記憶を思い出し、一瞬だけ顔をゆがめた。

「人殺しの俺がまともに人間でいられるのはハヅキのおかげだ」

コウは過去に一人、人を殺している。

それは事故などではなく、明確な殺意を持った殺人だった。

コウに母親はいない。小学校の低学年に家に強盗に入られ、その際に殺されてしまった。通り魔的な強盗で、たまたまコウの家が狙われたというだけだ。コウはその時、その強盗を包丁で刺し殺している。母親を殺したことで油断しきった強盗の背後から憎悪と殺意と生存本能を持って刺殺した。

「強盗である男に対する恐怖は母さんを殺されたという憎悪と殺意という怒りでねじふせることができた。後は人間すべてが持つ本能が勝手に体を動かしてくれた。そうするしかない。その後に残ったのは極大の自己嫌悪だ。そんな俺を、ハヅキは救ってくれた」

今でも人殺しと言うことに負い目がないわけではない。ただ、人殺しだから幸せになっただけではない。なんて思い込みを抱えることがまだギリギリ思春期と呼んで差し支えない年齢のコウのあるべき姿なのだろうが、コウにとってその思い込みはすでに毒にも薬にもならないまるで無意味なものになってしまっている。

人は生きている限り、幸せになっていい。

コウはそのことを本当の意味で理解していた。

だからこそ、コウはそれを理解させてくれたハヅキを愛してやまなかった。

二人の間に不快ではない沈黙が降り注いだ。少しすると、コウはその空気がどうにもむずがゆく感じ始める。やはり、こういう空気は苦手だ。

「それより、さ。今日は泊っていいけるの？」

コウが空気を変えるための問いにハヅキはピースサインでこたえ

た。

「やった！」

「ふふふ。存分にカップルらしいことをしましょう」

ハヅキがそういったその時、ハヅキの携帯電話が鳴り始める。ハヅキが応答した電話の内容はコウに問とって最悪だった。

「コウ、ごめん！ビクターが出たの！私、行かなきゃ！」

あわただしく外に出ようとするハヅキの準備をコウは手早く手伝い、玄関に送り届ける。

「……ごめんね」

本当にすまなさそうにするハヅキの頭をコウは撫でた。

「気にすんなよ。ハヅキは立派な仕事しているんだ。早く行きな」

コウの言葉にハヅキはもう一度謝ると外へ駆けていく。恐らくもうアパートの下には政府の車が来ているはずだ。

コウは溜息をつくと居間に残された料理の掃討に取りかかった。

こうなれば明日も父は帰ってこないだろう。父もハヅキと同じ施設で働いている。明日の朝御飯にシチューを回してしまうかと考えて、コウは肩を落とした。

翌日、昨日と同じ時間に家を出た。普段なら昨日の様な時間に家を出たのは暴力の化身であるアイのことがあったからだ。出来れば回避したいイベントであるが、あの「気まぐれ様」はコウがなにかやらかせば呼びつけるのでタチが悪い。何であれ、一年の半分をこの時間に準備することを毎度強制されていれば苦にもならない。ルウラとの約束もある。ともあれこんな生活ももうすぐ終わりだ。内申点と数学の成績のみで推薦を突破したコウに対してアイは未だに大学が決まっていない。恐らく同じ大学になることもないだろう。アイは典型的な文系だ。近い未来に訪れる平和にコウは一抹の寂しさを感じた。ああいうことが出来るのはもう最後だ。なんだかんだで話題に欠かない学校生活の貴重な思い出としてとらえるのも悪く

ない。……………いや、やっぱり復讐してやろうか？ 最後くらいこちらに軍配を上げさせてやってもいい気がしてきた。

そんなことを考えつつ、土手を自転車で走っていると眼前に金色の髪が見え、こちらにぶんぶん両手を振っている姿が見えた。

「ルウラさん？」

そばに来て自転車を降りると、さも嬉しそうに笑いかける美女は紛れもなくルウラだった。こんな美人は一度見れば忘れない。

「おはよう！ 暁コウ！」

「おはようございます。ルウラさん」

礼儀正しく返答したコウにルウラは眉毛を八の字にした。

「ど、どうしました？」

「いや、暁コウ。ハヅキから話は聞いただろう？ 私はお前が気に入っているということも十分に伝わったはずだ。だからな。もっと馴れ馴れしく、親愛をこめてルウラ、と呼ばび捨てで頼む。ああ、敬語も必要ないぞ。私はこれでもお前と同じ年くらいらしいからな」

色々と言いたいことはあったが、コウは一つのフレーズに最も興味を抱いた。

「らしい？」

「ああ、私は幼少期の記憶が無いんだ。正直どうだっていいんだけどな。そんなことよりも、ほら」

ルウラが手をちよいちよいとこっちに招くようなしぐさをする。

どうやら名前を読んでみろとのことらしかった。

「……ルウラ」

コウはなんとなく気恥ずかしかったがそれでも名前を呼び捨てで読んでみるとルウラはかみしめる様にその声を受け止めた。

「……………うん、いいものだ。どうにも呼び捨てにしてくれるのはいつもハヅキだけだ。異性から名前を呼び捨てにされるというのは初めての体験だよ。なにより呼び方がいい。可愛いぞ。頬を赤らめているところなんか特に。こういうのを萌えるというのだろうか」

「分析を止めてくれ」

コウがなおさら赤くなって顔を伏せるとルウラはさらに満足そうな顔を浮かべ、コウの肩を叩いた。その時、ルウラは異質な感覚を味わう。

「……ん」

「どうした？」

急にたたくことを止めたルウラに怪訝なものを感じ、コウが聞いたですが、ルウラは首を横に振るだけだった。

「で、用事ってなんだよ？」

コウは不思議に思ったものの会話を切り替える。

「ああ、お前に質問がしたいと思っていたんだ暁コウ。おまえは神を何だと思う？」

「はぁ？」

いきなり飛び出した電波な質問について素っ頓狂な声をあげてしまった。

「その質問はなんですか？」

「な、なんでまた敬語に戻る？」

「そりゃあ、いきなり今後のお付き合いを考えさせられるようになる質問が出れば誰だってそうなります」

冷たい目でルウラを見つめるコウを数秒見かえし、ルウラは瞳に涙をため始めた。コウの首筋に悪寒が走る。

「ちょ、ちょっと！なんで俺が悪いみたいなシチュエーションにしてんの！」

「だ、だってえ……人との話し方……良くわかんないんだもん」

「わかった。俺が悪かった。質問にもしつかりと答える。なっ？ごめんな。だから泣くのをやめてくれ！」

通学時間よりはまだ早い時間なので人通りがほとんどないとはいえ、もし誰かが通りがかりこの場面を見られれば非常にまずいというのはどんな人でも共通見解として抱くだろう。俯いて顔を手のひらで覆うルウラにコウは必死な言葉をかけると、ルウラは顔をあげ

てケロリとした顔をして「ならいいんだ」とコウに告げた。

「ふむふむ。意外にやってみると簡単だな。人間の文化……漫画か。創作モノというのは有る一定の真実を含まなければ売れることはないというのはどこの文化圏でも共通項のようだ。いや、勉強になった」

ルウラの言葉にコウはがっくりと肩を落とした。そんなコウの様子を無視して子犬の様な眼を向けて「早く、早く」と先ほどの質問の回答を催促してくるルウラにコウはノロノロと応対する。

「あゝええと。神とは何かだっけ？俺、神様信じてないんだけど参考になるの？」

コウの言葉にルウラはコクコクと首を振った。しばし考え、コウは口を開く。

「神様ってのは人が抱く最も偉大な……象徴みたいなもんじゃないか？俺自身さつき神様信じていないと言ったけど、信じているものならある。その中で最も信じている度合いが高いものが人によって神様って言葉になるんだろうな」

「では、コウにとっての神様って何だ？」

一瞬、ハヅキの顔を思い浮かべ、まだあつて間もないルウラに面と向かって言うことに恥ずかしさを感じ、コウは顔を赤くした。

「俺は神様って言葉が嫌いなんだよ」

コウは質問に答えず、違う言葉をルウラに提示する。

「……………言葉が嫌い？」

「言葉にすると、それに縛られる気がしてさ。ただでさえ神だの、天使だのって言葉が元々は人間が支配されたがって用意された言葉だろう？そういうのに置き換えるのってそれにはどれだけ頑張って手を延ばしても届かないって思えないか？」

コウの言葉をルウラは静かな笑みで受け止めた。知り合つて間もないとはいえ、いつも浮かべる元気のいい笑顔が嘘の様な、その一瞬を切り取って永遠に眺めていたいような、たおやかな笑みにコウは心が奪われた。その笑みをルウラが浮かべたのは一瞬だったが、

コウにとっては永遠とも思えるような、そんな時間だった。

「その考え方は、とても素敵だな」

「そ、そうか？」

「確かに信じているものが自身にとって明確に定義されるものであるならば、神として置いておくには適さない。生物というものはその目指すべきものを会得したいと考えるのが常道だ」

コウの回答に心底、納得したという表情を浮かべるルウラにコウは逆に一つの疑問を抱いた。

「……なんでこんな質問を？」

「自分探しの一環だよ」

ルウラはそういうと不敵な笑みをコウに向ける。コウは肩をすくめ、自分の腕時計を目にした。

「悪い。もう時間だ」

コウはそってルウラに時計をしめし、自転車にまたがった。

「暁コウ。また会いに来ていいか？」

「いつでもどうぞ」

「あ、あとな……その………」

ルウラはもじもじしながら眼を泳がせること数秒。ためらいがちにコウの眼を上目がちに見て、ぼそりと

「コウって呼んでいい？」

と消え入りそうな声で言った。

（何？この可愛い生き物……）

ああ、これが萌えるってやつか。と、コウが感慨にふけっている間もルウラは不安げな目を向けていた。

「ダ、ダメ？」

「いいよ」

「……………っそうか！それは良かった！ではコウ。またな！」
ぶんぶんと手を振るルウラにコウも手を振って返し、学校に向かった。

ルウラは対ビジター研究室に興奮気味に入室した。

「ハヅキ、ハヅキ！コウが私に呼び捨てを許してくれたぞ！」

室内は研究機器でごちゃごちゃしていたが、ルウラはそれを苦にすることもなくスルスルとハヅキが座っているデスクに到達した。ちなみに室内はハヅキとルウラの二人きりだ。

「そう、それは良かったわね」

飛びついて来たルウラを苦もなく受け止めるとハヅキはルウラの頭をなでる。

「で、今日はどうだったの？」

「うむ、短いながら非常に充実した時間であった！このままでは私は本当にお前たちの味方になってしまいたいそうだな！やはり人間というのはおもしろい！」

ルウラは興奮冷めやらぬ『神様』ルウラを床に立たせると、コーヒーをルウラのために入れに席を立つ。

「ハヅキ、私はミルクと砂糖アリアリで頼むぞ。どうにもブラックというのは舌に合わん」

「はいはい」

まるで子供の様な振る舞いのルウラを見て誰が神と判断するだろうか？しかし、紛れもなく、ルウラは神と呼ばれている存在だった。人を支配するものが神というならば、彼女を見た瞬間に数多の人間がひれ伏したあの様を見たものは誰だってこういう。

あの者こそ神だ。

「十二神が十月席。オクトバー・ルウラ」

ルウラがこの世界に顕現した時にたまたま居合わせたハヅキ達に名乗った記号だ。

ルウラが顕現したのはこの施設の大ホール。大きなミーティングがあり、全局員が集合していた時、彼女は唐突にビジターが現れる様にして顕現した。そして、その場に居合わせたハヅキを除いた全

ての人間は屈服した。

ただ、現れただけで人間は屈服したのだ。

人間の遺伝子に刻印された服従因子は一切の反抗を許さず、服従因子が擦り切れていると後に言われたハヅキでさえもその光景と迫力は今でも明確に思い出せる。

そしてルウラはこう言った。

「私はお前たちの世界を頂きに来た」

そう言いつつ幻想的な碧の翼を広げる彼女を止めたのはその場で唯一動けた人間ハヅキだ。もちろん闘ったわけではなく、話してみると意外に通じるものがあり、ルウラは侵攻を止めることになった。一時的に……ではあるが。

服従因子が作用しないハヅキがルウラを預かるのは当然の流れであつたし、ルウラを暗殺するべきという意見もあつたが、服従因子の前ではその意思すらもいとまたやすく屈服した。

あの時、ルウラが本気になればこの町を滅ぼすなど朝飯前だっただろう。いや、下手をすればこの国すらも屈服させていたかもしれない。何せ彼女に対して武器を向けられるものが誰ひとりとしていないし、彼女自身の戦闘能力も桁外れのものがある。

ファクターと呼ばれる異能の力。

彼女はあてがわれた個室で人間にとっては最も強力な兵器、核兵器の映像を見ていたがその威力を「大したことない」と一蹴していた。

嘘ではないだろう。

ハヅキは以前説明してもらったルウラのファクターを加味し、そう判断した。

完全に人間の上位存在。

それを神と呼ばずしてなんと呼ぶのだろうか？

そして、ルウラがもたらした内容は戦慄に値する内容だった。

今、各地で現れているビクターは天界の生物であり、この世界は天界との融合を迎えているということ。さらに十二神という名の通

り、神は十二柱存在するということ。神と同じ様に強度に差はあるものの、服従因子を作用させる天使という存在が世界融合の際に現れるだろうということ。

世界は壊れる。

どうやら天界でもこの事態は異常事態であるらしく、ならば自身よりも下位存在である人間に支配されるいわれはなく、支配しようとするのは神やそれに従う天使の間でも当然の行為ということらしいかった。そしてこの世界融合は止めるすべが無い。天界でも融合を止めようと研究は行われたらしいがどの研究も最後は挫折したとのことだった。

人間の世界は終末を迎える。

これがルウラの提示したこの世の未来の姿であり、絶望だった。話し合いの余地をルウラに尋ねたがルウラの答えは否定のみだった。なぜならば、すでに天界は戦争の準備が終わっており、世界融合が本格的に始まれば一挙に攻め入るということで天界は体制を整えていたからだ。今、出現しているビクターの何割かは天界からの尖兵らしく話し合う余地などすでに残されていないという。

それに真っ向から対抗したのがハヅキだった。話し合いが出来ないならばできることをする。さしあつたってはこれから加速度的に増えるであろうビクターに負けない軍備を整え、しかる後に対話を行う。

「対話？浅はかだな。見ただろう？私たちは、お前たちを屈服させることなど造作もない」

「私は、屈服していない。こうしてあなたと眼を合わせて会話をすることが出来る。だからこそ、望みはある。例えこの世界で私だけが屈服しない存在でも、可能性はゼロではない」

この言葉にいくらかの感銘を受けたルウラは以後服従因子を押さえつけ、ハヅキのそばに入り浸るようになった。どうやら人間に興味がわいたらしく、話を聞かせろとことあるごとにせがんでくる。

「うん。おまえたちの文化は非常に面白い！戦争とか、汚い部分は

いっぱいだがそれを補って余りある魅力がある！私も人間に生まれなかったよ」

「どんな生活していたの？」

「うん？私か？つまらん話だよ。私は生まれついて神というわけではない。元々は最下級天使だった。天界にも戦争はある。人間のものとは比べればかわいいものだがそれでも戦場の最前線というのは悲惨なものさ。気が付いたら私はそんな環境で戦っていた。だからな、神と呼ばれる地位を手にした時はうれしい感情よりも戸惑いだったよ。敵一体を倒すのに四苦八苦しているおろかものが大量虐殺をやれと言われれば、誰だって戸惑う。そういう環境さ」

「……………ルウラは、どうしたいの？」

「どうしたいのだろうな？私にもわからない。私の根源は天界だから、あの世界のためと考えるのは非常に普通のことなんだが、不思議なことにハヅキとあってから非常に毎日が面白い。天界の暮らしがどれだけ荒んでいたかがよくわかる。こんな毎日が続いてくれれば…………と、思う」

「それを望みに出来ないの？」

ルウラは悲しげに首を横に振る。

「そうしたいのは山々なんだがな。どうにも踏ん切りがつかない」

望んだことをそのまま実行するというのは簡単に見えて難しい。

ましてハヅキが推奨したのはルウラに裏切れと言ったようなものだ。だからこそハヅキはこう提案した。

「だったらこの世界をいろいろ見て回って。果たしてこの世界は滅ぼしてしまつてよいのか、というのはそれからでも遅くないでしょう？あなたは多分、天界が望むことはできない。もし、敵か味方かになれなければ逃げ出してもいいと思う。だって神様なんだもん。無責任くらいでいいと思うわ」

ハヅキの言葉にルウラは驚いた。

「そんなでいいのかい？ハヅキは立場上、私を引き入れなければならぬだろう？」

ルウラの言葉にハヅキは肩をすくめ、こう返答した。

「確かにあなたが私たちのことを助けてくれるなら助かるわ。けどあなたが救われない。今までいた世界と決別するのは容易なことではないし、それを無理強いするのは命の根底を否定することと同義よ。そこまでして私は勝とうと思わない。それにね、勝つとか負けるとか本当はない方がいいのよ」

ハヅキの言葉にルウラは首をかしげ、ハヅキは言葉をつづけた。

「私はあなたに神様との対話役をしてほしいな、と思っているの」

「私にメッセンジャーをしろと？ お前が使いっぱにしたいという私も神だぞ。中々に肝の据わったことを言ってくれるじゃあないか、人間」

ルウラが少しすごんで見せるが、ハヅキは涼やかに受け流した。

「神様でも私の友達だよ」

優雅に笑うハヅキにルウラは気の抜けた顔を見るとハヅキは大声で笑った。

「……………いい人間だな。ハヅキは。私はハヅキと友達か。うん、悪くないな。友達なんてできたのは初めてだ」

「どういたしました」

ルウラが現れてすでに二カ月。ルウラがハヅキに対して友人の様な立場を取るようになって二カ月。ルウラが人間の世界を蹂躪することにためらいを覚えるには十分な時間でもあった。だからこそ、決めている事がある。

もし十二神の誰かが顕現したならば話をしてみよう。それから自身身の振りを決めようと。

ルウラは、果たしてそれで天界側につくとしても自身があの世界のために戦えるのかということに疑問を感じていた。ハヅキに言われて会ってみたハヅキの恋人、暁コウ。あの男は非常に気に入ってしまったし、この一組のつれあいを失うというのは自身の大事な部分を喪失してしまうような恐怖があった。

「わかった。友人ハヅキ。私がお前たち側に付くにせよ、天界側に

つくにせよ、戦争を止めるということは進言してみよう」

ルウラはそう言うのと上機嫌な気配を消し去りハヅキに問いを發した。

「ところでハヅキ。コウなのだがな。この世界の出身で間違いないのだな？」

砂糖とミルクたっぷりのコーヒーをすすりながらルウラは努めてハヅキがショックを受けない方法を考えてみたが、不可能だという結論に達した。

「ええ、そうだけど……どうしたの？」

ハヅキの答えにルウラはしばし考え、重たい口を開いた。

「ファクターの素養がある」

「え？」

「循環の命名いのちなを持つ私が感じたんだ。間違いない。あの男は、戦える」

「……人間もファクターを使えるの？」

「恐らく世界が融合し始めた影響だろう。とりわけあの男からは強い力を感じるよ」

ルウラの言葉にハヅキは眼を伏せるだけだった。

恋人と昔話 神様と会話（後書き）

.....恋人.....だと.....？

日常崩壊

コウ達は屋上で自由時間を満喫していた。……自主的に創りだした自由時間はいつやっても気持のよいものである。

「おまえらいいのかよ？」

「俺もう学校決まっているから」

「進学しないから」

「おなか減ったから」

身長の低い柴村から順に、岡崎がエロ本を見ながら、木村が菓子パンをかじりながら三者三様に、しかし三人とも共通してやる気なく答える。

「コウ、本日は妻からのお叱りはなかったのかい？」

「止めてくれ岡崎。あいつとはそんなじゃあない。あんな暴君と付き合えるやつがいたらそいつは真正のドMだ。ある意味尊敬するぜ」

「けどさ。コウはよくがまんできるよね。男子の中では見てくれナンバーワンとか、中身を入れ替えろ、とか散々だよ」

木村が菓子パンを頬張りながら尊敬のまなざしをコウに向けた。

コウはその視線をにらみ返すが、木村は気にしなかった。

三人の力関係はしっかりしている。

コウはハヅキに強いがアイに弱い。

アイはコウに強いがハヅキに弱い。

ハヅキはアイに強いがコウに弱い。

コウとあの姉妹が今まで仲良くしてこられたのはこの力関係があったからかもしれない。

「もう、この学園生活もおわりか……いや、それどころじゃないかな」

柴村は暗に昨日出たというビジターのことを指した。

昨晚出たビジターは三人の被害者と一人の行方不明者を出して退

治された。ニュースで見た限りではあのゴリラ型と同種らしい。ビジターの厄介なところは銃撃がろくに効かないということにある。必然的に対ビジター兵器の使用が必要となるのだが、それが準備されるまでの時間稼ぎが中々の難題だった。

「世界が終わり始めているって気にさせられるよ」

「ハン。あんなの天災や自動車事故と一緒にねえか。その場に居合わせたら運が無いと嘆くしかないだろう」

柴村が悲観的な感想を漏らしたがコウは一蹴した。コウの意見に木村が感嘆の息を漏らす。

「コウって達観してるよねえ」

「そんなんじゃないって」

「俺は前から気になっていたぜ」

岡崎が食いつく。

「なんでお前はそんなに達観しているのか？そこで俺は一つの仮説を立ててみた。ズバリ、女だ。こいつは実は付き合っている女がいるからこれ程達観した意見を持っているのだ。童貞と非童貞はその精神熟練度において異常なまでの違いを有するという一般共通見解を見てわかるとおり、こいつに女がいるのは間違いない」

「な、なんだその暴論」

コウは否定したが、他の二人は違った。目には剣呑な光をたたえている。

「お、お前……前からもてるとは思っていたが………秘密にしていた……だと？ハーレムを創る気……だと？」

「ずるいよコウ！そんな暗い一面を持っていたなんて！代わってよ！」

「馬鹿！落ち着け馬鹿共！全部推測だろうが！つかハーレムってなんだ！創れるなら創ってみたいわ！」

コウの言葉など耳を貸さない二人は飛びかかる準備をし、暴論を説いた岡崎もそれに乗っかる。

「見ろ。容疑者は今、はっきりと願望を唱えたぞ」岡崎が邪悪に笑

のネタなのだろう。普段なら準備に付き合わされて、だりーとかうぜー、とか言っている連中だ。

「ああ、振ったよ。だからなんだっつーの」

コウは不機嫌に応えると三人から感嘆の声が漏れた。

「さっすが、男気あるねえ」

「やっぱり、一度痛い目にあわせた方が……」

「何で振ったのさ！ 今日エリコさん休んでんだよ！」

三人の好き勝手な物言いにコウは閉口した。普段は良い連中なんだが、調子に乗ると手がつけれない。かといっていい加減に応答するのも大変だし……。コウがどうしようかと首をひねったその時だった。

体育館から轟音が鳴り響く。

「なんだ！」

体育館倉庫から飛び出すとそこには、テレビニュースに写っていたビクターがいた。

そういう陳腐な表現しかできないくらいにそれは実感を伴うことが無かった。

しかし実物は映像があっさりと陳腐になる威圧感をもってコウ達をくぎ付けにした。

両腕部の隆起した筋肉は人など紙屑のように引きちぎるだろう。横に転がっているのは恐らく校庭につながる扉だろう。恐らく、というのは原形が留められていないレベルで破壊されているからだ。状況から推察するしかない。人間味を帯びない蟲の眼光がまるで悪い夢のように錯覚させるが、蟲の口腔部から吐き出される白い息はこれ以上ない生々しさを演出し、否応なくこれが現実であると教えてくれる。たっぷり十秒かかってようやくコウ達は自身の命が危機に瀕していると嫌でも実感させられた。

「あ、あれって、ニュースでやっていた奴だよね？ なんであんなのがいるのさ！」

木村の問いに応えられるものなどだれもない。ただ全員逃げる

ということで見解は一致していた。

「こっちだ！」

柴田の声に反応し、みんな体育館から脱出を試みる。それをビジターは分かっているかのように先回りした。

「くそっ！こいつ！」

「逃げらんねえのかよ！」

「ど、どどどどうすんのさあ！」

三人が動揺したその時、ビジターの頭部にバレーボールが命中した。ビジターは投げつけられた方向を向くとそこにはコウが立っていた。

「おにさんこちら、だ！こっちにきやがれ！」

コウは横に置いてあるバレーボールの入ったかごから次々とバレーボールをビジターに投げつける。

「ぶおおおおおおおお」

ビジターが吠え、コウに向かって突撃を開始した。

「暁！」

「お前ら早くいつて助け呼んで来い！このなかなら俺が一番運動能力高いんだ！」

コウはそういうとビジターに背を向けて逃げ始めた。三人はコウの言葉に頷くと逃亡を開始する。

「絶対助け連れてくるからな！」

コウは柴田の声は聞こえなかった。ビジターの早さは巨体に似合わないものだった。咄嗟にビジターの股をくぐるように飛び込んだ事が幸運だった。ビジターはコウの姿を追い、自身の頭を股にくぐらせようとしたのだ。もちろん、盛大にすっ転ぶ。

「……頭は悪いみたいだな」

コウは自身の認識を口に出して確認し、校庭に向かって全力で走り出した。百メートルを十秒前後で走り抜けるその脚力を持ってしてもビジターの方が早い。ほうほうの体で校庭に飛び出した背中を剛腕がかすめる。剛腕が起こした風圧でバランスを崩され、コウは

地面を転げ回った。

「馬鹿力め！」

そう毒づいて、コウは自身に芽生えた恐怖心を強引にねじ伏せる。それでもしなければ腰が砕け、もう二度と立ちあがれないという確信があった。先ほどのビジターの攻撃が外れたのは運が良かっただけだ。あの剛腕は撫でるだけでコウの人生を終わらせることが出来る。死の恐怖が体の動きを止めるというなら、それは拒絶しなければならないことだった。

天災？自動車事故？何を言っていたんだ俺は！逃げろ逃げろ逃げろ！死ぬなんてまっぴらだ！

学校の壁沿いにコウは逃亡を開始するが、速度を相手が上回る限り、どうしてもどこかで手詰まりになる。幸いなことはこの学校が対ビジター施設からそう離れていないことだ。救援が来る時間はそう長くない。それまでは何とか逃げ切る必要がある。もう一つ幸いなことがある。それはコウのポケットにはハヅキが渡してくれた『防犯道具』があることだった。使用は一発限り。タイミングを見誤る訳にはいかない。コウは戦略を組み立てると、校庭に置いてある用具入れに向けて猛然と走りだした。あそこにはスコップや鍬がある。

ビジターがコウに追いつくのとコウが用具入れにたどりつくタイミングはほぼ同時だった。馬鹿正直に左腕を横に薙ぐビジターの攻撃をコウは肉食獣よろしく地面に伏せることで回避し、全身のばねを使い、跳ね起きる。用具入れがビジターにより粉碎され、中身が飛び出した。視界の隅に映った鍬を乱暴につかみ上げると一気にビジターの大腿部に振りおろした。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

まるで女の悲鳴の様な声をあげてビジターが体を乱暴に捻り、鋏を持ったコウはその動きに連動して投げ出され、地面を転がる。転がった時にいくつも擦り傷を作るも、それに耐えて体を起した。ビジターは足に刺さったままの鋏を取るのに執着しているようでコウに意識を向けていない。

（いまだ！）

コウはポケットからカード状のデバイスを取り出した。円盤状のメーターを最大値にまで捻りあげるとコウはそれをビジターへ放り投げた。デバイスはビジターの上に差し掛かった瞬間、高圧電流を一気に放出し、その高圧電流は間違いなくビジターに直撃した。先ほどの悲鳴とは比べ物にならない絶叫をビジターは上げ、ついには沈黙した。絶対に最大出力で使わない、とハヅキに念を押されて渡された『防犯装置』は初めて使った時に「どこが防犯装置だ」と絶叫した時の記憶以上の出力で放たれ、生物の神経系を焼き切ったはずだ。

（……やった？）

コウは油断なく、ビジターを観察したが一向に動く気配が無く、自身の身の安全を確認したコウは地にへたり込んだ。荒く息を吸うと上から自身を呼ぶ声がして、コウは頭を校舎二階へと向ける。そこにはメツと涙を浮かべたアイがいた。

「おっす」

コウが軽く手を挙げると二人は何か喚き始めたが、コウはそれを聞くことなく地面に仰向けになった。先ほどから与えられた神経ストレスは看過できるものではない。生死の境界線を闘うはめになっってしまったというのは一高校生であるコウがその場に突っ伏してしまふのは仕方が無いことといえた。

「……ハヅキに感謝だな」

コウは寝転びながらビジターを見つめる。高圧電流により、黒く焦げた皮膚から異臭が漂い、コウは顔をしかめ、体を起した。さすがにこんなところで休憩するのは避けたいという心理からだだったが、結果的にその行動がコウを救った。ビジターが無動作で飛び跳ね、コウのもとへジャンプしてきたのだ。すでに立ち上がっていたコウは必死に逃げ回り何とか上空から落ちてきたビジターをかわす。

ここでようやくコウは目の前の生物がどういう存在なのかということを実感した。冷静に考えれば、こんなことで片付くのならばあ

んなに被害は出ないのだ。ひとたび出現すれば多大な被害を出す眼前の怪物はその無表情にもかかわらず、はつきりと怒りの意思を伝えていた。

「おはようございますってか」

コウは苦し紛れに軽口をたたく。そうでもしなければ冷静さを保てなかった。そして、目の前の怪物は動いた。動作が見えたわけではない。見えないくらいにビジターは素早く動いた。それでもカンに従ったとしかいいようのない回避運動をコウはとった。果たしてその回避運動は吉と出た。左に飛んだコウはビジターの右腕による攻撃は直撃した。盛大に吹き飛び、校舎に激突した。空気が一気に肺から絞り出され、目の前が真っ黒になる。まだ体が原形を保っていられたのも、ギリギリで意識が途切れなかったのも、回避運動で衝撃をにげさせたことと、ビジターがまだ電撃攻撃から回復しきっていないという偶然と必然が生んだ結果だ。

それでも被害は甚大だった。

右腕が灼熱した。骨が肉を割き、体外に飛び出している。

絶叫。

脳震盪で鈍っていた頭が一気に覚醒し、容赦の無い痛みを伝える。

視界が真っ赤に染まる。

死の恐怖が体を硬直させる。

死にたくないと強烈に願うが体が思うように動かない。恐ろしい。自身の名前を友人が呼ぶ声が聞こえ、なんとか立ち上がるが、状況は絶望的だ。先ほどの『防犯装置』は完全に使い捨てのため、拾っても意味が無い。手詰まりだ。

コウが棒立ちになり、目を閉じたことをせせら笑うようにビジターは悠然と歩を進め始めた。

一步一步が死へのカウントダウンで、そしてそのカウントダウンはビジター次第。

どうしようもなく自身の命を掌握されたということを嫌というほどコウは感じた。

死ぬ？

こんなにあっさりと？

コウの脳裏に走馬灯は走らなかった。

頭を埋め尽くすのはハヅキ。ハヅキハヅキハヅキハヅキハヅキハヅキハ。

きつと泣く。

コウはハヅキの泣き顔を思い浮かべた。

ああ、俺は……最も愛する人を泣かせてしまうのか。

コウは眼を、双眸を開く。

ビジターが歩を進めることを、止めた。

「ふざけるな」

コウから発せられる怒気は常人のそれとは比較にならない。きつとどの様な人間が相手でも今のコウの眼の前に立とうとは思わないだろう。

いきなり現れて俺の生活をめちゃくちゃにして、こんな恐怖を与えて、なおかつ命まで奪うだって？

ふざけるのも大概にしろ。

頭の中に、言葉が、走った。

「我が名は……『喰らう者』！」

その言葉をコウが口にした瞬間にそれは起こった。

コウの右腕が一気に回復した。血が周りの命を喰らい、その命を体の回復に充てた結果だった。

異能の力、『ファクター』

それが完全に起動した。

今なお発される人ならざる怒気に、ビジターは一步後ずさり、続けてそれを否定するかのように、死のカウントダウンである距離を一足飛びにゼロにした。

それはコウにとってのカウントダウンだったか？

それともビジターにとってのカウントダウンだったか？

繰り出された右ストレートを、コウは完璧なまでに対処して見せ

の胸にはコウが空けた穴があいている。

エリコの光を失った眼がコウの眼を真正面にとらえた。

胸に空いた真っ黒な穴はすでに命が無いという事実をコウに叩きつけた。

昨日のビジャー被害で行方不明者が一人。

その行方不明者であったエリコは、ここにいた。

初めて人を殺した時に口から出たのは絶叫だった。

今回、口から出たのは朝食の残骸だった。

男は嘔吐しながら理解した。

自身の日常は、この時をもって全て失われたのだと。

日常崩壊（後書き）

戦闘シーンって難しいですね。上手い人がうらやましいです。

2-1 神を知る者たち

ようやく胃液まではきだした嘔吐が終わったところに、更なる異常があたりを包んだ。

空間が歪み、辺りから五体のコウが殺したビジターと同種のビジターが現れた。

コウは茫然とそれを眺めた。

(なんなんだ……………)

全てのビジターがコウを視界にとらえる。

コウはビジターなど見てはいなかった。

もう一度、エリコを、エリコの死体を視界に収める。

愛くるしい双眸は濁り、二度と動くことはない。特徴的な赤毛も今や汚れて見る影もなくなっている。ふっくらとしていた頬も痩せこけて悲惨さを強調していた。

コウはエリコの頬に触れた。

冷たい。

コウは夢であってほしいと神に祈らなかった。

代わりに口から出たのは怒りの声。

「何なんだお前らあああああああっ！」

コウの絶叫と同時に、校門に近いビジターの肩に、棒の様なものが突き刺さった。そして、遅れてその棒が大爆発を起こす。

対ビジター部隊が到着したのだ。

マインスロアーと呼ばれる兵器。爆弾を目標に打ち込んでから爆発をさせる代物。ビジター相手には一定の効果が確認されており、前線部隊に配備されている。

「目標に着弾！」

「学生一名が孤立！絶対に助けるぞ！」

「杭打ち機を持ってこい！」

現れたのは巨大な杭打ち機だ。ビジターの生命力を一撃のもとに

奪い去る程の威力を兼ね備えたそれは巨大さゆえに自走させなければ実用に堪えない代物だったが、十二分にその役目を果たす性能を兼ね備えていた。

略称 ストライク・アイゼン

現場ではもっぱら杭打ち機で通っている。

「杭打ち機、動かします!」

傍から見れば悪い冗談にしか見えないそれは恐るべき速度で稼働した。

今までの戦闘記録とルウラがもたらした情報により分かったことは、この手の類のビジターは斬撃などの近接兵装が有効だということ。杭打ち機はその巨体を先ほど爆発でよろめかしたビジターに突撃させ、一気に杭を打ち込んだ。

直径三十センチの鉄の棒が撃ち込まれ、ビジターの一体が沈黙した。

「目標沈黙! 続いて第二打!」

「全員近接戦闘装備! 取り込まれた人間はすでに人間ではない! 躊躇うな!」

四人の隊員は一人の自走兵器操縦者を残し、剣を構える。

多大な熱量を持ってビジターの肉体を裂くその斬撃兵器はハツキが開発した熱源ブレード。

略称 アグニート

「かれ!」

コウは嫌な予感がした。

今、自身が使ったわけのわからない能力とあの隊員たちの手持ちの武器の差は? あんな化け物に接近戦?

「駄目だ! こいつらは……………」

コウが先ほど勝利したのはコウのファクターがもたらした驚異的な身体能力にある。隊員たちが行っている突撃は自殺行為の様にコウに映った。

しかし、コウが予想した悲劇は起こらなかった。ビジターが繰り

出す大ぶりの攻撃を的確に回避し、着実にダメージを与えていく。

「第二射！準備完了！」

巨大な自走兵器が足を切り裂かれ動きが鈍ったビジターに狙いを定める。

「発射！」

杭打ち機が疾走し、ビジターを貫いた。鉄杭が引き抜かれ、次のビジターに狙いを定める。

その時、隊員の一人の体が宙を舞い、地面に転がった。首が背中に向いており、即死だとわかる。

「ぎゃわああああああああああああああああああ」

ビジターが怒りの咆哮を上げる。

コウは知る由もないが、ビジターが同時に現れたというのはこれが初めてのケースなのだ。訓練を積んでいるとはいえ、隊員たちは未だに慣れていない。

「動揺するな！カバーに回るんだ！」

隊長とおもわしき人間が素早く指示を出し、戦列を整えようとするがまた一人拭きとばされ、戦列が崩れていく。

コウは駆けだしていた。向かう先はストライク・アイゼンだ。

ストライク・アイゼンは持ち運びには向かない巨体により自走装置で無理やり動かしている。そのお陰で小回りが利かない。相手の機動性を奪わなければ何の役にも立たないのだ。

だからビジターの機動力を奪う必要があった。あんなに素早く動き回るビジターを相手に前線のバックアップが無い状態ではただの鉄の塊だ。

だがこの場にはその弱点を克服させる者がいた。

コウはストライク・アイゼンに取り付けてある、本来はフックを引っ掛ける部分を引っ掴むと力任せに持ち上げる。ほんの少し前まで持ち合わせていなかった怪力が発揮され、コウはストライク・アイゼンを片腕で振り回した。

コウは頭から、中に人間が居るということを締め出す。

すでに人間ではない。

先ほどの隊員が言っていた言葉にコウはしがみついた。

エリコが内蔵されたビジターを葬った際に感じたわずかばかりの暖かさを完全に無視した。

誰かが死ぬのを見るのはまっぴらだ。

人間ではないやつが人間を殺そうとしているんだ。人間が人間でない奴を殺して何が悪い！

判別できない絶叫とともに、ストライク・アイゼンを一番近くにいたビジターに脳天から叩きつける。杭がビジターを頭から突き刺した。

「発射！」

コウの言葉と行動に戸惑いを隠せなかった隊員が何とか反応し、ストライク・アイゼンの発射機構を作動させる。本来の運用とは程遠い使い方をしたせいで作動しなかった杭打ち機能が今度こそ作動し、ビジターの体を頭から股間にかけて貫通する。

「次！」

コウがストライク・アイゼンを構え、次のビジターを視認する。

駆けだしたコウはビジターのスピードをはるかに上回る。

激突。

それだけでは終わらない。コウはそのビジターを引きずったままもう一体のビジターに突撃した。

発射機構が作動。二体のビジターが同時に貫通される。ビジターは貫通されたまましばらく動いたが、ついには沈黙した。

コウは肩で息をつくとき、ストライク・アイゼンに体を預け、ずるずると地面に腰掛けた。

「少年。君は一体……………」

隊長らしい人物がコウに近寄るが、コウの眼には何も映っていない。

（六人、殺した？）

コウは手のひらを顔に押し付けた。

自分が動かないと隊員が死んでいた。ビジターに取り込まれた人間は人間ではない。その言葉にすがって頭の片隅で冷徹に対処した自分がいた。

人間でなかったというのなら一体何なのだ？

自分に宿った正体不明の力も平常心を欠く一因だった。

訳のわからない世界に放り込まれた気分だ。

それでも右腕はこれが現実だと教えてくれた。

右腕にはエリコを貫いた感触が未だ生々しく残っているのだから。顔にへばりついた血はエリコのもの。

体を小さく丸め、外界から届く声を完全に遮断した。

狂っている。こんな世界は狂っている。

そしてもう逃げられない。

自分はすでに、この世界で命を奪ったのだから。

強烈な諦観と後悔が内に渦巻き、コウは思考を闇に落とそうとする。

その時だ。

くぐもった悲鳴とともにコウに声をかけていた隊長が突然地面に倒れる音を聞いてコウが顔を上げた。周りを見回すと全ての隊員が地面に突っ伏している。それだけではない。校舎からも声が無くなり、誰もが床にひれ伏していた。

コウはあまりの異常事態に飛び起きる。

辺りを見回すと、ただ一人エリコの死体を観察する黒髪の男の姿を確認することが出来た。腰にぶら下げた剣が気にならないぐらいに融和したその服装はこの世界が夢ではないのかと錯覚させた。

「見ていて気分のいいものではないな。この様な物の怪を前線に送り込むことに疑問を覚えるよ」

男はそういうとただ一人、地面に立っているコウに視線を向けた。鋭い眼がコウを捕らえ、ありありと警戒を示していた。

「人間の分際でファクターを使用するか」

コウはこの男を目にした時から一つの確信があった。

こいつは敵だ。

この惨状を作り上げた側だ。

「いきなり戦闘モードか。なるほど、馬鹿じゃあないらしいね」

男が剣を構え、コウに相對する。

「ロウアーだ。とりあえず、君がどういう存在なのか確かめてみようか」

そう短く告げるとロウアーはふっと揺れた。コウ以外がその光景を見ればそうとしか形容できないだろう。だが、コウはしっかりと捕らえていた。

恐るべき速度でコウの後方に現れたロウアーの斬撃をステップでかわす。

（はええ！）

ロウアーが驚いたように動きを止めた。その隙にコウは後方に飛んで距離を取る。あり得ないくらいに向上した身体能力が今はあるがたかった。

「おや？終わったと思ったんだけどな」

「なんなんだよ。てめえ！」

「ええと、ああ、なるほど。大体わかったぞ。君のファクターが。確かにそう考えれば合理的だし、戦闘向きだ。僕の服従因子に反応しないのもそのファクターに起因しているのだろうか」

「無視してんじゃねえ！」

「やれやれ、ルウラ様を迎えに来たと思えばこれだ。まったく愉快だよ」

まるでこちらの会話を無視して話を続けるロウアーの言葉にコウは見知った名前を見つけた。

「ルウラ？」

「おっ、知っているのかい？」

はじめてコウの言葉にロウアーは反応し、コウに笑みを浮かべる。「助かったよ。あの方は非常に尊い方なんだ。僕もこの世界に出てきて日が浅くてね。 Dank 様に見つけて来いと言われた時はどうし

ようかと思ったよ。教えてくれるかい？」

コウは無性に腹が立った。こいつはまるで自分を見ていない。

「……………やだね」

コウの言葉にロウアーが意外そうな顔をする。

「なんでだい？……………ああ！そうか！こう言えばいいかな？『教えれば命だけは助けてやる』ってさ。はい。これで君の命は保証された。さあ、教えておくれ」

コウは即答した。

「断る！おまえは気に食わない！」

コウの拒絶の言葉にロウアーが溜息。

「…………ええと、じゃあこうしよう。体に直接聞いてやるってね。痛い目を見るから限界になったら喋ってね」

言動も顔もふざけているが、眼前の男から発生している殺気は本物だ。常人ならばおびえるような嗜虐の波動をコウは怒りで跳ね返した。

「うるせえんだよ。お前。現れてから好き勝手なことばかり言いやがって」

コウはそういうとロウアーを指差し、こう告げた。

「俺はお前の敵だ！俺を殺そうってんなら、逆にその喉笛、喰いちぎる！」

「へえ？」

ロウアーが剣を握る手に力を入れるのとコウがそばに転がっていた剣『アグニート』を拾うのは同時だった。先に動いたのはコウ。力任せに叩きつけたアグニートがロウアーの剣と火花を散らす。

「その剣もらった！」

コウが右拳を剣の腹に叩きつけた。エリコの命を奪った右腕ならばそんな鉄の塊を喰いつくのはわけが無いという見立てだったが、結果的には単に剣を上弾いただけだった。

「え？」

「自分のファクターが何たるかもわかっていないのか！」

コウはロウアーの蹴りを腹に浴び、盛大に飛ばされる。

「ファクターとはこう使う！」

ロウアーが上空に飛び上がる。

「我が名は、『法を定めしもの』！」

ロウアーは剣をコウに向けた。

「空気の弾丸が君を撃つ！」

ロウアーの周りが歪み、高圧縮された空気弾がコウに降り注いだ。コウは地面を転がり何とか回避する。轟音とともに地面に空いた頭大の穴を見て、コウは悪寒が走った。あれを受ければ死んでしまう。着地したロウアーははるか遠くにいるにもかかわらず、虚空を剣で横薙ぎに切った。

「その斬撃は空を裂き、君に届く！」

その声とともに、斬撃が飛んだ。コウは身をかめると一陣の風が通り抜けた。後方をみると校庭に植えられていた数本の木が両断されている。洒落にならない。原理については一切無視した。ただでさえ異常事態が乱発している。起こったことを受け入れるしかない。いらない思考で集中力を削がれる訳にはいかない。

「よそ見をしている暇があるのか！」

コウが後方を見ている隙に急接近したロウアーが視界に入る。コウは必死に後方に飛ぶも、剣の切っ先がコウの体を捕らえ、肩から腰にかけての出血を引き起こした。

（なんで、あの力が出なかった？）

コウは頭で原因を突き止めようとするが、ロウアーはそれを嘲笑うかのように距離を詰めてくる。

「ファクターも」

振り下ろされた一撃を防げたのはロウアーが遊んでいるからに他ならない。

「まともに使えないってのに」

必死にアグニートで対応するコウを馬鹿にしたような力任せの斬撃が幾度も叩きつけられる。

「よくも」

下からの斬撃にアグニートが弾かれ宙を舞う。

「逆らえる！」

アグニートを吹き飛ばした斬撃が返す刀でコウに襲いかかる。コウは破れかぶれに、それでも半ば確信を持って、告げた。

「我が名は『喰らう者』！」

瞬間、既に乾き始めていた右腕に付着していた血が勢いよく脈動し、刃の形を伴って、ロウアーの斬撃を受け止めた。そしてそのまま触れた剣を――コウの血が喰らった。

「――ッ！」

ロウアーは眼を見開いた。

剣の刀身が、嘘のように消えうせたからだ。

ロウアーが見せた隙は決して大きくはなかったものの、先ほど弾かれ、重力の法則に従って落ちてきたアグニートをコウが手にする時間には十分だった。

コウは天へと手を伸ばし、武器を手にとるとそのままロウアーの前で腰を落とし、体を独楽の様に回転させた。そのまま下から思い切り勢いを付けた斬撃を力任せにロウアーに向かって振りぬく。

「おらあああああああああ！」

「ぐうっ！」

何の剣術も学んでいない未熟な斬撃はそれでもコウの全身全霊を叩きつける一撃だった。ロウアーは咄嗟に避けたが、アグニートの切っ先はロウアーの腰から肩にかけての刀傷をしっかりとつけていった。

たまらず大きく後退したロウアーはコウを睨みつける。コウの周りにはコウの血液が生きているかのように揺らめいていた。

「なるほど、こうやって起動させるわけだ。勉強になったぜ」

コウはアグニートを肩に担いで姿勢を正す。

「お揃いだな。自称人間以上」

ロウアーにつけた傷を指し、コウは傲然と笑う。

「お前……何者だ？」

ロウアーがうめくように発した問いをコウは鼻で笑った。

「もう言っただろうが。お前の、敵だよ！」

コウは怒りを伴って疾走した。

ロウアーは咄嗟にそばに倒れていた対ビクター隊員からアグニートを奪い、コウと激突した。

「どうしたっ！人間以上様が人間の武器を使うのかい！」

コウは鏑迫り合いを演出し、ロウアーはそれに乗る形になった。

「もう帰っちゃまえよ！何考えているかわかんねえが迷惑なんだよ！」
力任せにロウアーを弾く。力だけはコウが圧倒的に上回っていた。
コウのファクターは『喰らう』こと。

それは触れれば容赦なく発動するファクターだ。

今、コウが喰らっているのは周りに充満する命。それは意志を持たない石や土や空気からが最も喰らうことが容易であり、その喰らった命は全て身体能力へと転化されていた。

絶え間ない連続攻撃は確実にロウアーを追い詰めている。

ロウアーは自身の苦戦を認めざるを得なかった。

ロウアーのファクター。

『言語実現』《ワード・アジャスト》

ロウアーの発した言葉をそのまま実現する応用が利くファクターだが、そのファクターは言葉にしなければ発動しない。

今、その様な隙はない。コウの攻撃を全力で対応しなければならぬ。必然、呼吸は必要最低限に抑えなくてはならぬ、言葉など発することが出来ない。

「グッ！」

コウの攻撃がついにロウアーのアグニートを弾き飛ばす。しかし、同時にコウのアグニートも折れてしまった。元々、人間の武装。人間以上の力を発揮する者が使えるようには設計されていない。しかし、それでもコウには攻撃の手段が残されていた。

（右肩いただき！）

自身の血液を刃の形に形成し、ロウアーの右肩に突き刺そうとかぶりを振った。

しかし、一時は刃となった血液が形を失う。

「なっ！」

「隙あり！」

ロウアーがコウを蹴りで弾き飛ばした。コウは地面を転がるが、跳ね起きる。

「どうやら君のファクターは時間制限があるようだな」

ロウアーが勝ち誇ったように笑った。コウは何度もファクターを起動させようとするが、一向に反応しない。

「ファクターなしで僕の攻撃。受け切れるか！」

ロウアーが言葉を紡ごうとし、コウは身構える。一瞬が永遠に引き延ばされ、コウはある種の覚悟を固めようとした。

その時だ。

ロウアーが突然、何かに殴られたように後方に倒れ、そのまま沈黙した。

コウは訳のわからない事態に頭が混乱しかけたその時、見知った声が響いた。

「やりすぎだよ。ロウアー」

コウは声の主を求めて、頭の中で「やめてくれ」と叫びながら視線をうつす。

そこにいたのはルウラだった。

コウは何も口にできなかった。

2-1 神を知る者たち（後書き）

とりあえず二章で段落つかせようと思います。

2-2 十月と五月の関係

「……………こんにちは。コウ」

ルウラは静かにコウに語りかけた。

「きつと駄目なんだろうな。私はどうしようもなくお前たちとは違う存在で、恐らく、きつと、今ここで手を出すのは間違いなんだと、私はそう思っていた。そういうのはきつとフェアじゃない。しかし、これはやりすぎだ」

コウはルウラの言うことがちつとも理解できない。ルウラもそれはもちろんわかっていて、それでもルウラは続けた。

「私はな。ハヅキの言うことを友人として聞いてもいいと思ったし、今でもそのつもりだ。そして、それは今実行されなくてはならない。ロウアーまでいるんだ。見ているんだろう！十二神！」

ルウラの声にこたえるかのように、空間が歪む。それはビジターが現れる歪みとはまるで別物だ。光り輝き、神々しさを伴っている。「よりにもよってお前か。 Dank」

空間の波が消え、現れた青年は全身を緑で統一し、放つ雰囲気は人間のものとはまるで違っていた。

見れば目が潰れるような威圧感。

そして絶対なる死の空気。

腰が膝から落ちかけた。コウに服従因子は働かない。ならば何がそうさせたのか？

恐怖だ。

蛇に睨まれた蛙の気持ちが一瞬で理解できた。あれと対峙するなんてまともじゃない。絶望的な力の差を目にした瞬間理解できる。

姿かたちが一緒でも、あれはまるで別の存在だ。なまじ姿かたちが一緒であるだけなおさら恐怖が倍增する。

コウは足を踏ん張り何とかその雰囲気堪える。

「十二神が五月席。メイ・Dank」

青年は名乗るとルウラに向き合った。

「久しぶりだね。オクトバー。どうにも人間界というのは肌に合わなくていけない」

「他の神は？」

ルウラは他の神が居ることを願わずにはいられなかった。よりもよってルウラにとっては最悪の神が顕現していたのだ。

こいつとは絶対的に話が成立しない。

「いないよ。君が最初で次が僕。この順番だけはランダムだからね。どうにも困ったものだ」

言っている事とは裏腹にダンクは低く笑った。

「さて、オクトバー。愛しいオクトバー。君は何をしているのかな？この世界に顕現した順に人間共を片っ端から支配していくと、そう決めたはずだ」

ダンクの言葉にルウラは俯き、そして意を決したようにダンクを見据えた。

「もうやめよう」

「なに？」

ルウラの言葉にダンクは顔をしかめる。

「私には人間を支配していいように思えないんだ。人間達はいいい奴がいっぱいいるよ。支配しなくても解り合うことができるって、私にはわかったんだ。支配なんて必要ないんだよ。私は人間達と戦いたくない。それにこんな生物兵器を採用するなんて一体どういうつもりなんだ？」

ルウラは人間を内蔵していたビジターを指差した。

「私はあんな残虐な行いを初めてみた。戦争をするのだってルールがあるのは天界でも人間界でも一緒だろう。そんな行為を行う戦争に、私は加担出来ない」

ルウラの言葉を黙って聞いていたダンクはそこまで聞いて心底失望を表した視線をルウラに投げてよこした。

「なにいつてんの？」

「……………」

予想出来ていた返答にルウラは唇を噛む。

「あれほど素晴らしい化け物もないだろう。なまじ人間が上等な意識を有しているせいでその支配には色々と面倒なものがあつたんだ。あれはそれを一気に解決する。人間という動力を自分で調達してくれるし、なにより人間達にはいい見せしめになるだろう？どうにも楽園を自主的に築いたと思いいむ連中はタチが悪い。こういうものでしつかりと支配する者とされるものを明確にしないと」

ダंकはそこまでいって言葉を切り、当たり前のようにルウラに告げた。

「管理しにくいだろう？」

「ダंक！」

「眼を覚ましなって。今のも見ただろう。そこにいる人間は極めつけのイレギュラーだとしても、他の人間はとるに取らない存在だよ。単なる労働力。帳簿に人×個数って付けていくらいな存在なんだって。実際、僕たちが手をひねるまでもなく死んじゃうんだからさあ。戻っておいでよ。家畜に同情したってしょうがないでしょ？」

「私は、お前たちの戦争に参加できないと言った！」

「ああもう。わかったからさ。だったら後ろでおとなしくしときなよ。後は僕がやっとくからさあ。君は疲れてんだよ。僕の所に来なよ。精一杯愛してあげるからさ。そうすりゃルウラも元に戻るって」
ダंकは心底鬱陶しそうに手をブンブンと振った。

コウは今の会話が心底おぞましいものだど理解はしていたが足が動かなかった。

この二人の間に立てば、死ぬ。

それほどの威圧感が二人の間に火花となってひしめいていた。

しかしコウの恐怖心は次のダंकの言葉で一瞬にして消え去ることになる。

「せっかくオクトバーに人間とは儚いものなんだよって教えるためにこいつらを転送したのにさ」

聞き逃さなかった。

先の言葉は震えを止めるのには最適だ。

「お前がつ！」

一瞬でコウはキレた。

ファクターが起動せずともコウに内包された命はしっかりと運動能力に反映されている。コウは膨大な殺意をもってダンクに突撃した。ルウラの制止の声など届いていない。

恐怖心などすではるか後方だ。

[illegible]

Dankがコウを見たその瞬間、爆発。コウの体が宙を舞い、地面にたたきつけられる。

「がつ！」

あまりの激痛のこは動けなくなった。まるで全身が引き裂かれるような痛みに苦悶するが、先ほど喰らった命が急速にこへの傷を癒していく。

「あれあれ？　おかしいな。体がバラバラになるはずだったんだけど……それっ！」

ダンクがコウに意識を向けると、ダンクの周りから巨大な竜巻が発生し、コウに殺到した。それは無情な破壊の奔流。ひとたび巻き取ればただでは済まない。大自然の驚異的な力をいともたやすくダンクは発生させ、意のままに操って見せた。

コウは死を覚悟し、目をつぶった。

しかし、死を伴う痛みはいつまでもコウに向かつてはこなかった。

コウが恐る恐る眼を開けるとそこに有ったはずの破壊の奔流は嘘のように消えうせていた。

「……なんのつもりかなあ？」

ダンクがルウラを睨みつける。ルウラのファクターがダンク
のファクターを打ち消した結果だった。

「止めてもらいたい。私はその男が気に入っている」

その言葉をルウラがダンクに投げつけた瞬間、起こったのは破壊の嵐だ。辺りの地面がルウラとコウ、気絶している隊員たちがいる場所を除いて球体状にえぐり取られていく。それは何の前触れもなく、完全な気まぐれを持って辺りをえぐる。ルウラは必死にダンクが起こしている破壊衝動を防いでいた。

ルウラのファクター。

『流転世界』《ワールド・ムーバー》

あらゆる流れを掌握し、移動するものであれば問答無用でその流れを支配下に置く。

ルウラはそのファクターを使用し、ダンクが行う無差別な爆撃を何とかそらしていた。

校庭に平らな場所を見つけたことが難しくなった時、ようやくダンクの癪癪じみた破壊は終わった。

「オクトバー………なんて言ったの？」

ダンクが先ほどの攻撃とは嘘の様なすがりつく声を出しているのがコウに取って意外だった。

「オクトバーはそんな男が気に入ったっていうの？ そんな取るに足らない人間が！」

「そんなんだから私はお前が嫌いなんだ！」

ルウラの絶対的な拒絶にダンクは嘆きの叫びをあげた。

「なんで？ なんで！ なんでそんなこと言うのさ！ 殺しちゃうよ？ 僕はその人間を殺しちゃう！」

「ああ、そうかい！ だったら私は！ 私の戦争をさせてもらう！ 人間の側に立ち、お前たちを止める！」

ルウラが敵意を向ける行為をダンクは必死に否定したいのかブツブツと手を顔に押し当て、俯きながら何かをつぶやき、そして顔をあげたところには先ほどの狂態が嘘のように涼やかな顔をしていた。

「やめておこう。僕の『絶対空間』《エリア・マスター》と君の『流転世界』《ワールド・ムーバー》では決着がつかない」

その言葉にもルウラは油断を示さない。

「僕は、君が大好きだ。だからね。君が好きなものは僕の好きなもの。君が好きな奴は僕の殺す奴だ」

ダルクは憎悪の眼差しをコウに向けた。

「ただでは殺さない。二週間後、お前を殺しに来る。お前が見つからなければあらゆる破壊を行ってやる。それまでせいぜい、自身の日常は二度と戻らない様を噛みしめろ！」

圧倒的な憎悪にコウは持ちこたえ、なおかつ立ち上がって見せた。「上等だ。俺はお前がどうしようもなく気に食わない！」

コウの啖呵にダルクは邪悪にほほ笑み、空間を歪ませて姿を消した。

去った後には何も残らなかった。ロウアーの姿が見えないあたり、空間跳躍で一緒に飛んだらしい。

険しい表情を消さないコウにおずおずとルウラは近寄った。

「コウ……すまない。私は………」

「戦い方を教えてくれ」

「え？」

「あいつは俺の日常を完膚ないまでにぶっ壊してくれた。俺はあいつが許せない。しかもあいつはこれから俺を殺すという。あんなにコケにされたのは初めてだ」

コウの怒りはルウラに不安を与えるには十分だった。

「コウはなにもしなくていい！私は何とかする！」

「駄目なんだよ」

「え？」

「おかしいんだ。体の中が、熱くて、あいつを許すなって言っている」

「コウでは勝てない」

ルウラは嘘をついた。ルウラが校庭にたどりついたのはちょうどコウがロウアーと交戦している真っ最中だ。

ルウラはコウのファクターをしっかりと見た。時間制限はあるも

の、コウのファクターならば――神を喰らえる可能性がある。

「私はハヅキの友人だ。友人の恋人を死地に引きずり込むわけには
いけない」

「ずれてんぜ。ルウラ。もう引きずり込まれている」

「コウ」

「それにな。俺は、また殺しちゃった」

「え？」

「殺しちゃったんだよ。自分を好いてくれていた女の子だけじゃない。あのビジターの中には人間が居たっていうのに！」

コウ自身の身を裂く叫びはルウラを激しく動揺させる。

「コウ、違う！それは……ッ！」

コウがルウラの肩を掴み、ルウラの言葉をさえぎった。

「なのに、俺に何もするなというのか！それはあんまりだ！俺は立ち止まらない！立ち止まってしまえば……俺は………もう耐えられない」

はじめは勢いよく放たれていた声が終わりになるにつれ小さくな
っていき、最後には消え入りそうな声になっていた。

「……………たのむよ。ルウラ。俺を……………助けてくれ」

「私は……」

まるで自分が消えてしまうかのような恐怖をたたえた目がルウラ
を逃がさない。それは懇願と形容するにも軽く思えるほどの切実な
願い。

頼むからこの手に武器を。

生き残るための武器を。

死者に追いつかれないための武器を。

長い葛藤の末、ルウラは首を縦に振った。

かくして契約は結ばれた。

その契約が良いものなのか？

少なくとも今のルウラには不吉なものにしか思えなかった。

2-2 十月と五月の関係（後書き）

別に残酷描写って言うほどでもなかったかなあ……

2-3 人類最強（笑）

過不足なくきっかり三分。

全力で使用しても手を抜いて使用してもきっかり三分。

それがコウのファクターと呼ばれる異能の力。その有効時間だ。

血を媒介に力を発揮するコウのファクターは触れるものを喰らい、

コウの栄養とする。

ただし血液がコウの体を触れていなければファクターの力は失われる。

血液はコウの体に触れている限り、簡易な形状に変形することが出来る。有効射程は五十センチ。血を刃に形状選択した場合は刃渡り五十センチの刃を形成することになる。

ファクターは命名を告げなければ十全の効力を発揮しない。強力なファクターを所有する神であるルウラもその例にもれず、命名を告げない場合は半分程度の力しか出ないらしい。そしてコウは命名を告げなければファクターの起動すらできなかった。ゆえに戦闘でファクターを使う際にわざわざ相手に命名を告げなければならないというのは大きなデイス・アドバンテージと言えた。

自身のファクターに名前を付けることを勧められたが、コウは気乗りせず断った。

使えれば何でもいい。名前なんかつけて愛着を抱く必要もない。

「おめでとう。暁コウ。とりあえずコウが今のところ人類最強だ」

ルウラの拍手が第一訓練所に響く。あれから二日後、コウ、ハヅキ、ルウラの三人は学校の校庭と代わり映えしない大きな訓練所の壁沿いでコウのファクターについての評価をしていた。

「はあ？」

「今のところファクター使用が出来るのは人間でコウだけだ。しかも極めて戦闘に向いた能力。これは上級天使のロウアーといい勝負

が出来るわけだよ。教える方としてもいくらか気が楽だ」

ルウラは向こうの世界でもかなりの経験を積んでいたらしく、コウの肩を叩いた。

対するコウはハヅキに目くばせすると、ハヅキはほほ笑んでルウラの言葉を肯定した。

「検査結果からみても今のコウは常人の八倍くらいの身体能力を持っている。これは間違いなく人類最強と言っていい数値よ。ルウラの情報と統合すると一般的な天使は人間の五倍くらいの身体能力。頼もしいわね。惚れ直しちゃう」

ハヅキの言葉を受けてもコウは実感が無い。だから人類最強という称号もぞんざいに受け取るしかなかった。

「どうだっていいよ。そんなもん。それより二週間後の命だ。さっさと訓練始めようぜ」

コウが何の遮蔽物もない訓練場中央に移動しようとするのをルウラは足払いで転がした。

「いってえ！なにすんだ！」

「話が終わっていないぞ。コウ、今から言う言葉をよく覚えておけ」
ルウラが一呼吸置いて、言葉を発した。

「最強は最恐たれ」

コウがまるで理解していない顔を見ると、ルウラが補足を続ける。
「最も強いものは敵味方問わずに恐れられなければならない。まして私たちの様な十二神は最強と呼ばれる者達だ。十二もいるのに最強とはこれいかに、といったところではあるが突っ込みは受け付けんど。コウ、ダンクを目の前にした時の感情を思い出せ」

コウはすぐさまあの場面を思い出すことができた。目の前にしただけであの威圧感。絶対なる死の空気。あれとまた対峙しなければならなのかと思うと……正直足が竦む。

「あれが、サイキョウだ」

「……………」

「コウ自身が人間サイキョウであるという自覚が無いと困るんだ。」

サイキョウはな。負けることは許されない。退くことは許されない。死ぬことは許されない。勝つことしか許されない。強さは義務だ。そう思い続けることが出来るからサイキョウなんだ。負けることを想像しろ。自身が負ければその後の自身を取り巻く世界がどうなるかも実感できない。自身の意思が届かないところで自分の世界を好き勝手されるのは業腹ものだろう？」

「こういうときってお前が死ねばお前の大事な人はどうなるっていうんじゃないのか？」

「私はそんな人間論に興味はない。土壇場になった時、他人のためなら力が出るというやつは結局のところ余力を残しているというものだ。そんな思考行為を行わずとも、サイキョウは常に十全以上の力が発揮できなくてはならない。リミッターくらい自分ではずせ。たとえ孤独になっても戦場に立ち続け、たった一人でも勝利を獲得する。それが十二神の強さだ」

それは壮絶な思考だった。自身が単体として成り立っていないければ成立しない思考だ。群体であることが自然である人間に同じ思考ができるのか、と問われれば今まで普通の人間社会にいたコウは否定するしかなかった。

「これは私たちの思考だからコウに強要するつもりはない。だがコウはサイキョウを倒し、自らのサイキョウを体得しなければならない」

「俺自身のサイキョウ……」

自分の手を見つめる。たった三分しか起動しないファクターでサイキョウを目指す。

途方もないことに思えた。

「そう気負うな。人類最強。天界最強が今から手取り足とり教えて、戦場では埃程度くらいにしか価値が無いサイキョウ（笑）を銀の弾丸に変えてやるぞ」

そう言うルウラは楽しそうに笑った。

「楽しみだなあ。私は訓練で教える側に立つのは初めてなんだ！初

体験なんだ！しっかり教えてやるからな！大船に乗ったつもりでいてくれ！」

そう言ってルウラは薄い胸を張った。

（金髪が巨乳だっていうのは嘘だな、こりゃあ）

コウは失礼な考えを抱きながら、訓練所中央に向かって歩き始めた。

その途端、コウ周辺の空間が爆ぜ、痛みが体中を襲い、コウは宙を舞った。全身が悲鳴を上げながら地面に激突し、それでもコウはなんとか自身の意識を繋ぎとめた。

（……これはっ粘着野郎の………ッ！）

「つとまあ、あいつの戦場に立つならばこういうことがいつでも起こると考えた方がいい。今の衝撃をよく覚えておけ。原理は違うが私も似たようなことができる。攻撃方法も私とダンクは結構似通っているんだ。腹立たしいことに。このタイミングであいつが出てきたのは人類的にも私的にも最悪だが訓練的にはありがたいな。私が仮想敵を務めることが出来る。………どうした？なんだかえらく驚いた顔をしているが、戦場で一々そんな顔をしていたら吹き飛ばされるぞ」

「え、いや……バチが当たったのかと………」

「バチ？」

「いや、なんでもない！」

「ん？そうか。思ったより元気で良かった。こういうのは不意打ちでないと意味が無いからな。それではファクターの使用ができて間もないコウの常時発動についてさらっと説明しておこうか。体を動かしたいのは山々だろうがもう少しこらえてくれ」

「常時発動？」

コウは膝が軋むのを我慢しながらなんとか立ち上がる。痛みを顔に出さないくらいにはもう回復していた。

「うむ、ファクター使用者はそのファクターによっては発動してなくてもその恩恵にあやかることができる場合があるんだ。コウの人

間離れした身体能力なんかいい例だな。もしかすると他に目覚めるかもしれないから自分の体の変化に一々戸惑うことはないぞ。基本的には便利なものばかりだ」

「へえ。そいつは楽しみだ」

「自身の体の変化に戸惑わないのは頼もしい限りだ。私など大変だったというのに」

「神様でもこういうことは動揺するのか？」

「ああ、私の体に初めて変化が現れたのは十三歳？多分、そのくらいだ。あの時は本当に肝が冷むぐぐぐぐッ！」

ルウラの言葉をハヅキが後ろから口を塞いで強引に中断させた。

「コウ、ここからは私の話」

にっこりと笑うルウラから形容しがたい雰囲気を感じたのかもがいたいたルウラが急速におとなしくしていった。それ位の迫力があつたのだが、コウにとってはいつものことなのでさりと受け止める。

「アグニートを使ってわかったと思うけど、あれはコウが使うには脆すぎるの」

「だろうな」

ロウアーとの攻防であつたという間に砕け散つたあの剣は人外の怪力を振るう者たちの間では完全に使い捨ての武器でしかない。

「だから、私はこういう扱いを提案しようと思います」

ハヅキが壁に掛けてあつた布を一気に取り払う。そこにあつたのは六振りのアグニートだった。そして、その六振りのアグニートは三本一対左右に分けられ、その間は金属製のパーツでつなげられ、その間はちょうどコウの体がすっぽり入る空間だった。

「おおっ！」

コウが目を輝かせる。かっこいい。三本がまとめられ、一つのユニットの様に見えるそれはハヅキの見た目と実用性を取りそろえるセンスが光った意匠だ。

「これはアグニートを完全に使い捨てにすること前提にした装備よ。」

とりあえず付けてみて」

コウがハヅキの指示につきあいさっそく身につけてみると意味もなく自身が強くなった気がした。

「とりあえず身につけた感触は実感してもらっている通りよ」

「いい感じだぜ。ハヅキが作ってくれた武器が身を守ってくれるってのは心強い」

「ごめんね。ダンクに通じる遠距離武装があればそれに越したことはないんだけど……………」

ビジターに遠距離武装はまともなダメージを与えられない。対物ライフルすら耐えきった例も確認されている。そこで推奨された戦闘方法はアグニートによる接近戦だった。点で攻撃するよりも線で攻撃する斬撃は確実に相手の体組織にダメージを与えた。勿論、遠距離兵器も開発中だが、もろもろの事情で実現には未だ程遠い。

「メイ・ダンクは空間を自在に操る神だ。コウが接近しようとして弾き飛ばされたのもあいつがまわりに常駐させている空間爆弾に引っ掛かったからだ。奴があの場合でその気になれば地図を書きなおさなければならぬくらいの被害が出ていた。空間を何の支えもなく進む弾丸なんてなんの意味も持たない」

ルウラの補足は真実なのだろう。対峙したからこそ、コウはその言葉がなんの修飾も帯びていないということがわかる。現にあの神は何の苦もなく竜巻を起して見せ、校庭を爆撃後のようにしてみせたのだ。

「むしろこちらが遠距離武装を使っていれば要らぬ思考になる。今回のはあきらめろ」

「かまわねえさ」

コウがアグニートの柄を強く握りしめる。

「命を奪うんだ。切り殺した時の実感を伴った方がいい。そういう体験を大事にできないと、足を踏み外しちまう」

「コウ？」

ルウラが不安げな目をコウに向けるがコウはまるで気付いていな

かった。

「まだビジターも出てんだろ？俺には経験値が絶対的に足りてない。現場には回してくれ。給料は出るんだろう？」

コウは Dank が現れた次の日には全ての日常を放り投げていた。大学の進学もあきらめたし、エリコの葬式も顔を出したが誰にも見つからないように隠れたままの出席となった。

コウはすでにわかっていたのだ。

命を奪えば自身の日常などあっさりとぶっ壊れるのだ、と。

幼少時に味わった崩壊と今回の崩壊は何も変わらない。

新しい日常にすぐさま慣れることができないのであれば、その日常は地獄だ。だからこそコウは今の日常を積極的に自身の基礎とするために、ほんの数日前にあった日常をぼっさりと捨てる努力をしていた。

実際、コウの申し出はハヅキにとってありがたかった。コウは恋人だ。それでも今、この対ビジター施設において最大の戦力だ。被害は少ない方がいい。

「コウ。気負いすぎじゃない？」

それでもハヅキはコウを気遣わずにはいられなかった。でなければ一体、どんな人間がこの今にも壊れてしまいそうな男を気遣ってやるのだろうか？

コウはその言葉に首を横に振ることで答えた。

仕方ないだろう、と。

「さ、次はなんだ？」

「とりあえずその武器を装備したまま私たちが帰ってくるまで全力疾走だ」

ルウラはそう言って足を振り上げると地面にそのまま振り下ろした。

変化は一瞬で起こった。

コウが見ている前で平らにならされていた訓練場はあっという間に起伏に富んだアスレチック・コースと化していた。ファクターに

よる地形変化。地盤沈下などを思い起こしてもらえばいい。地面は『移動する』。

「な、なんだこりゃあ……」

そう言うのがやつのコウに得意げにルウラは鼻を鳴らす。

「ふふん、神だからな。これくらいは朝飯前だ。では私たちは一旦ここを外す」

「ちょっと待ってくれ」

「なんだ？」

「そういや何であの粘着神は二週間なんて期間を設けたんだ？やろうと思えば俺の殺すことなんてあの場でできたはずだろう？」

「一応、ここは人間の世界だからな。世界が融合しきっていない今、異物である私達はある程度の期間を置いてこの世界に体を慣らさないと体が重いんだ。なんというか……水中で体を動かしている感じといえは近いかな。そんな状態で私と本気でやり合えばどうなるか。結果は明らかだろう」

ルウラが戦わなかったのは自分が足手まといだったからだとわかり、コウは唇をかむ。

「そんな顔をするな。それにあいつは趣味が悪い。あいつにとって私と戦うことは喜びなんだ。きつと、もうひとつの目的があったんだよ」

「もう一つの目的？」

「……コウが人間としてあり続けられるか。私が人間に寄り添えるのか。そういったものを思い知らせたかったのだろう。あの神は心に空間を創ることに慣れている」

人間としてあり続けられるか？

コウにとってその問いは重いものだった。

こんな力を身に付けた自分は人間と呼んでいい存在なのか？

ルウラにとっても同様だ。

この二カ月、友好的に接してきた人間などコウとハヅキのみである。

服従因子は抑えているはずなのに自分を知った人間は誰もが恐れの顔で自分をみる。

相互の意思がなければ分かりあうことなどできない。

「心配するな。私が付いているんだ。コウは勝つよ」

そう言い残して訓練所にコウを一人残してルウラとハヅキは一度ハヅキの部屋に戻ることにした。

「心配するな。私は神だぞ。流れを司る神だ。お前たちは、何も失わない」

廊下の途中、ルウラが無言だったハヅキを勇気づけようと声をかけた時、目の前に無精ひげを生やした長身の男、コウの父であるタダトが片手をあげて二人を呼びとめた。

「おじさま」

「よう。ハヅキちゃん。相変わらずかわいいね。ルウラさんも相変わらずお美しい」

「誰だ？お前は」

ルウラが露骨に警戒を宿した視線を注ぐと、タダトは苦笑して顎を撫でる。

「あらら、うちの息子から話は聞いていませんか。コウの父、暁タダトです。はじめまして」

そう言ってタダトは頭を下げた。コウの父であるということが分かってルウラは超然とした態度を崩さず、面を上げるよう促した。「なるほど、コウの御父上であったか。これは失礼した。いずれ会いたいと思っていたのだ」

ルウラは不敵に笑い、タダトはそんなルウラに手をさしのばした。ルウラはその手を不思議そうに見つめ、ややあってから握り返した。握手が済んだ後もルウラはまじまじと自分の手を見つめ続けた。そんなルウラの様子にハヅキはほほ笑む。

「息子はどうです？」

タダトも相手が神にもかかわらずリラックスした雰囲気であった。他の職員はルウラを恐れているというのに。

「うむ、そなたの息子は飛びきり優秀だ。二週間後には生まれ変わったような姿をお見せできるだろう。……ところで御父上よ。一つ聞いておきたいことがあったのだ」

「コウについて、ですか？」

「うむ、私がコウを鍛える上で絶対にわかっておきたいことだ」

ルウラの真剣な声をタダトは押されることなく受け止めた。

「何故コウは未だに戦える？」

ルウラはコウに感じていた正体不明の不安がここにあると考えていた。あの戦わなければならぬという強迫観念にとりつかれたような渴望は一体どこから来るのか。

「本来ならば挫折してもおかしくない。それぐらいのトラウマがコウに植え付けられたはずだ。それどころか本来回避したい行為すら取り込もうとする。近しかった人間を殺してしまったということは私には想像程度にしか認識できないが、天使にしたってあそこまでは戦おうとは思えない。復讐を考えるにしたって相手は人間の軍隊など一薙ぎで蹴散らす力を持った神だぞ。普通なら逃げることを考える。今にして思えば、死にかけたというのにそれでもコウはダンクに気持ちが屈していなかった。……異常だよ」

ルウラの言葉に、タダトはしばらく目を閉じ、長い逡巡を得て重い口を開く。

「あれは母を失っています。そして母を奪った仇をその手に掛けました。だからでしょう」

タダトは表向きにはコウの母親が死の間際に強盗に最後の反撃をしたと処理されている事件を簡潔に伝える。

「戦わなければ生き残れないというトラウマをあれはすでに抱えています。逃げるように、戦う。戦わなければ砕け散ってしまうんですよ。ハズキちゃんのおかげで随分と持ち直してはいましたが、根底では何も変わっていません」

「なるほど、自分の弱さを見たくないから戦う、か」

ルウラは頭を抱える思いだった。なんて刹那的な男だ。放ってお

けば自分が敵と定めた相手を見境なしに突っ込み続ける自殺志願者の様な真似をしでかしかねない。 Dank に歯向かい続けることができたのも恐怖を更なる恐怖で覆っていた、という真実は不安材料でしかない。

「コウは、強いですよ」

それでもハヅキはハッキリと二人が持っているであろう評価を切り捨てた。

「コウは学校の人たちを守りました」

「ハヅキちゃん。それは結果論だ」

「結果は結果です。そして結果は今までの自身を写す鏡です。コウは今まで私のことを幸せにくれた。アイのことだって良く面倒見てくれたし、ルウラにも良き友人として察することができ。そういう人間なんですよ。コウは」

「ハヅキ……それは正直、それがどうしたという話になる」

「ルウラ。あなたは神でしょう？ もっと超然としていなさいな。コウの周りには誰がいると思っているの？」

ハヅキはルウラとタダトを一笑に伏した。何を深刻ぶっているのだ、と。

「コウの周りには神であるルウラがいる。武器を創る私がいる。もしコウが死ぬとしたら、私たちが敗北するのと同義だわ。私たちが付いているコウを、貴方は弱いと評価するのかしら？」

「……………それは、確かにそう評価できないな」

ハヅキの言葉にルウラは己を恥じた。どうやら神といえど自分もまだまだらしい。

「心配しないでくださいおじさま。コウのことは私たちが助けます」
ハヅキの言葉にタダトは無言で頭を下げた。

2-3 人類最強(笑) (後書き)

みんな一緒に苦労しようよ

2-4 VS神（模擬戦）

走り込みで汗だくになったコウの前にいきなり現れたのは膨大に積み上げられた書籍の山だ。訓練所はすでにルウラのファクターで元に戻っている。

「空間転移？」

コウが茫然とつぶやく。

「原理は違う。とにかく移動させた。理屈なんていちいち考えようと思うな。神の振るう力というのはそういうものだ」

コウは本を一冊手に取ってみるが何の異常もない。たしかにファクターというのは常識にとられない力のようだ。

「今からお前に知識を与える。古今東西の武芸を記した知識はきつとお前の役に立つことだろう」

「いや、そりゃあそうなんだろうけどよ。これ全部読むのは相当骨だぜ？ただでさえ俺は本を読むのは苦手なんだ。これだけの量、読める時間なんかねえよ」

コウの意見はもつともだ。コウの目の前に積まれている本は段ボール十箱分を超えている。コウの抗議をルウラは鼻で笑った。

「コウ、私は神だぞ。私のファクターは流れるものであれば何だって制御下に置くことができる。知識は流れる。お前がこれらの知識を体得するのに十分もかからんよ。身についた知識はある程度は経験に転化される。いやでもその脳髓に武芸百般をぶち込んでやろう」

「知識と経験を自分にインストールすると考えて」

ハヅキの補足にコウは頷いた。自分の頭が不法にいじくりまわされる気がして気は乗らないが、そんなこと言っている場合ではない。むしろこれは非常に贅沢だろう。

「……………マトリックス見ていてよかったぜ」

コウはそう言ってルウラの前に立った。

「コウ、まずは私のファクターを受け入れろ。相手が認可しなければ

ば私のファクターは生物に作用しない。そして自分のファクターを封印しろ。コウのファクターは『喰らう』だ。ダנקの空間地雷でお前が消し飛ばなかったのはコウ自身のファクターがファクターに対する抵抗値が高かったからだ。この場合、それは邪魔になる」

「そんなにこと言われたってどうやって……」

「念じろ。それだけでいい。……始めるぞ」

ルウラが目を閉じ、コウの胸に手を置いた瞬間、コウの世界は暗転した。

「終わりだ」

どれだけの時が経ったのか、声に目覚めコウが目を開ける。どうやら立ったまま気を失っていたらしい。体を改めてみるが特に何かが変わったという実感はまるでなかった。

「俺、なんか変わったか？」

コウがハヅキに問いかけた時、側面から攻撃の気配を感じ、的確に防御する。ルウラの放った拳だった。その防御法はまるで体に無理のない自然体での防御だ。

「そういうことだ」

ニヤリ、とルウラが笑いかける。実感はなくとも既に体に反映されている。そういうことらしかった。

「おお、さすがだな！」

「神だからな！さらに実感をしたくば、まずは体を動かすことだ。私が相手をしてやろう。装備はそのままで来い。ファクターは使うなよ」

「ああ、今ならだれにも負ける気がしないぜ！」

コウとルウラが訓練所中央に移動する。

「コウ。ダנקのファクターは『空間支配』《エリア・マスター》だ。空間地雷を始め、空間を支配する動きを仕掛けてくる。私のファクターは相手の認可が無ければ相手に影響を及ぼすことはできないが、奴はお構いなしだ。頭に入れておけよ」

「ああ」

二人は対峙し、コウは地面の感触を確かめるように足を踏みしめる一方、ルウラは不敵な笑みを浮かべるだけ。

「それでは、はじめ！」

ハヅキの声と同時にコウは空中に弾き飛ばされた。

「うわああああああああ！」

空中でバランスを取って地面に着地する。

「上手い着地だが、いきなりそんな形で自分の強さを実感してどうする」

ルウラはそういうと手を振って竜巻を創造した。見た目にも威圧感も Dank のそれと同等の規模だ。

「私の場合、大気を操ることでこういうことをやっているが、あいつの竜巻は空間を捻じってそう見せているだけだ。私と同じ攻撃をしたとか奴は言っていたが、威力はあいつの方が上と考える。何せあいつの攻撃は防御なんて関係の無い、空間による攻撃なのだから」

そう言ってコウに竜巻を繰り出すルウラの攻撃をコウはかわしたが、かわした先でもコウは吹き飛ばされた。

「ちなみに私がしている空間地雷のまねごとでも大気を操って起こしている」

コウはあまりダメージを受けていないことを確認する。遊ばれているというのがありありとわかった。まるで人間が虫をつついて遊んでいるような、それだけの力の差を実感する。

「私のファクターは防御よりなんだよ。対してあいつは攻撃に向いている。私へ攻撃をあいつは届かせることはできないが、それは私も一緒だ。お互い決定打が無い。そこでコウの存在が生きてくる」

そうルウラの解説が続く間もコウは空中に弾き飛ばされ続けた。

「これで防御寄りか！」と悪態をつきたかったが、だんだん弾き飛ばされた時の対処も慣れてきた。

「おりゃああああああああ！」

地に足をついた瞬間、ジグザグに動いてルウラの攻撃をかわそう

と試みる。しかし、あっさりとまた空中に弾かれる。空間地雷（正確にはモドキ）は周辺に常駐していることを完全に頭から失念していた。

「お前のファクターは『喰らう』だ。この空間地雷を突破し、奴の首を喰いちぎる弾丸とならなければならない」

ルウラがそう言うのと、コウは背中から一気に地面に押しつぶされた。ルウラが大気の塊をコウの背中に叩きつけたのだ。

「神の力は実感してもらえたかな？ 私が語り終えるまでにコウが吹き飛ばされた回数は十二回。もちろんあいつはお前を殺すつもりだからな。十二回死んだということだ」

背中 of 圧迫がとかれたが、コウは地面に突っ伏したままだった。

「……………ちきしょう」

剣を抜くこともできず敗北した現実のコウを打ちのめした。しかもルウラは一步だって動いていない。

「まあ、案ずるな。なにも一対一をやれと言っているわけではない。古今東西の武芸をつめこんだとしても、人間と神では力の差は絶望的だと実感してもらうためにしたのだから。感想は？」

「人間の武芸が役に立たない」

昔の人たちには申し訳ないが、上空からの爆撃に対して接近戦を臨んでいるようなものだ。武芸がある程度の接近をしなければ効力を発揮しないものである以上、距離を選ばないダークやルウラに対抗するには分が悪い。

「そうだな。あと、この際言ってしまうがコウ。知識を身につけたお前にはある程度のフィードバックがあるとはいえ、達人とはなっていない。本を読んでも全てを覚えているわけではないだろう？ 実際に書籍を読んで強くなったつもり……よりは随分とマシだが実際に体に応用できるのは今コウに移動させた知識の一割くらいだと考えた方がいい」

「そうなの？」

「そうなのだ。そしてもう一つ——ファクター使いは命名に縛られ

る」

「命名に縛られる？」

「そうだ。『喰らう者』。コウはその命名を持つ限りにおいて、自身の命名にふさわしい生き方、戦い方しかできない。だからこそファクターに目覚めたともいえるのだがな」

「……………」

「ファクターを使えるようになるということはそういうことだ。特に私達は自身の命名を大事にする。侮辱されれば殺すこともいとわない。それ程に命名というものは重いものだ」

「思ったより不器用になっちまってんだな」

コウの自嘲にルウラは言葉を持ち合わせることができない。命名に縛られるというジレンマは絶対的な強さを持つ神ですら抜け出すことができないからだ。

「まあ、別にいいか」

「いいのか？」

「だって鶏が先か卵が先かってだけの話だろう？ 実際、ファクターに目覚めたからって俺自身の思考が豹変したってわけでもないし、ファクター使いになって性格が変わってしまった奴がいたとして、それこそこんな力を得れば性格が変わったってしょうがないって思えるしさ。命名に縛られるなんて単なる言葉の騙しだろ」

ルウラは眼から鱗がこぼれる気分を味わった。そんな考え方したことともなかった。そう言われれば随分と気が楽になる。コウの言葉こそ後付けなら何とでもいえると言う者もいるだろうが、そんなこと言い始めれば世の中の全てが虚構だ。

「それで俺は実際あの粘着神にどうすればいい？」

「私のファクターは防御よりだと言ったろう。コウは私に守られながら限られた三分間、コウのファクターで奴の障壁を突破し、神を喰い殺せ」

「……………俺のファクターは通用するのか？」

コウの疑問は当然と言えた。先ほどの体験からしてみれば自身の

ファクターなど吹けば飛ぶように感じてしまう。

「通じるさ。聾盲目に見てもコウのファクターは殺傷能力に秀でている。なにより一度はダנקの攻撃を受けてコウは生還しているだろう。それから見てもコウのファクターは神のファクターすら喰らっているということが分かる。コウのファクターは神に届く。あいつが気を抜いていたというのもあるが、そう言えばコウだって気を抜いていた。あいつの攻撃は、もう実感しただろう？コウのファクターは攻防一体だ。意識すれば受け止められる。」

ルウラの励ましの言葉をコウは素直に受け取ることにした。そうしなければやっていけない。

「さあ、では続けよう。いい加減吹き飛ばされ慣れたろう？次はファクターを使用し、私に接近して見せろ」

「ああ、次は目にも物を見せてやるぜ」

模擬戦を続けるコウをハヅキは注意深く観察した。

回避のくせ、攻撃のくせ、適正。それらすべてを勘案し、コウの為の武装を創るのはハヅキにできる最大の支援だ。

さしあたって、コウが使っても壊れない武装。

それを作る必要があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394y/>

ワールド・ロスト

2011年11月14日03時11分発行